

令和 6 年度

「きみの地域づくり学校」まとめ



令和 7 年 2 月

きみの地域づくり学校運営協議会 紀美野町

和歌山大学食農総合研究教育センター

目次

ご挨拶	P.2-4
令和 6 年度プログラム	P.5-16
座学編修了レポート	P.17-43
実践編修了レポート	P.44-56

ご挨拶

令和6年度「きみの地域づくり学校（座学編・実践編）」は、その全スケジュールを終え、残すところは修了式のみとなりました。事務局を務められた紀美野町まちづくり課職員の皆さんの献身的な努力に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。



「地域おこし協力隊員、行政職員、地域づくりに関心を寄せる社会人、地域住民、地元高校生と大学生」からなる多世代間の学びの場は、座学編では毎回40名余の参加を得て、成功裡にその責務を果たしました。また、実践編では、町内外のメンター事業者の協力を得て、11名の受講者が充実したインターンシップに取り組みました。

本まとめには、受講者の皆さんが得た「学び」「気づき」「繋がり」、そして「踏み出した一歩」が綴られています。「地域づくり」の学びにはゴールはありません。次年度は新たな参加者を得て、学びの輪を拡げたいと考えています。同窓生の皆さんには更なるご支援をお願いします。

きみの地域づくり学校長 藤田 武弘

追手門学院大学 教授 / 和歌山大学 名誉教授

ご挨拶



「第2回きみの地域づくり学校」が、ご講義いただきました先輩事業者の皆さん、大学等の有識者の方々、運営に携わっていただいた皆さんのおかげにより、大きな成果をあげ無事に修了式を迎えることができました。そして熱心に通っていただいた参加者の皆様、ありがとうございました。

今回は昨年に引き続き2回目の開催となりましたが、座学編に「地域に学ぶ人づくり」として「地域に根ざした教育」を指向されている方々にもご登壇いただき、公開シンポジウムも開催でき、私自身、教育関係者として仲間の輪が広がったことを嬉しく感じております。

これらの取り組みにより、魅力ある地域づくりを地域の内外の方々とともに考え学んでゆくことによって、関係人口を創出することや、学生たちの地域の課題に向き合うきっかけを作り、定住、移住を考えた「まちづくり」を強めていくという「きみの地域づくり学校」の目的に沿うことができたのではないかと思います。

次年度の開催につきましては、これまでの取り組みを考慮しながら、より多くの方々に参加していただけるよう、また共に「きみの地域づくり学校」を充実させる仲間が増えてゆくことを願って、新しいシステムにも取り組むこととしておりますので、よろしくお願い申し上げます。

2025 年度春に、より多くの仲間の皆さんにお会いできることを楽しみにしております。

きみの地域づくり学校運営協議会長 山上 範子

学校法人りら創造芸術学園 理事長 / りら創造芸術高等学校長

ご挨拶

きみの地域づくり学校受講生の皆様、
修了おめでとうございます。この1年間、
大変熱心に講義で勉強され、先輩事業者
の下でのインターンシップにも励まれたことと思います。創業や継業等
を通して、農山村で心豊かに幸せに生きたいと考えていらっしゃる皆様
の夢が実現されるように私たちもしっかりと応援、お手伝いをしてい
きたいと思っています。



また、修了生の中から、町内店舗の利用や、棚田の再生活動への参加、
起業や新規就農等の動きが起きており、きみの地域づくり学校をきっか
けとして町の関係人口が着実に増えていることを実感しております。今
年度修了された皆様も、紀美野で1年間学んでいただいたご縁を大切に、
関係人口や還流人口としてつながり続けていただくとともに、当町へ、
そして和歌山県へ移住を考えてくださる方や、さらには、なりわい創業
をされる方が増え、全国各地で地域を支える人材として活躍して欲しい
と心から願っております。

紀美野町長 小川 裕康

きみの地域づくり学校について

過疎化、少子高齢化が進む一方で、「田園回帰」と呼ばれる若い世代の移住が増えつつあり、移住せずとも地域に関わって応援する「関係人口」も注目されています。紀美野町においても、古民家カフェやレストラン、農家民泊やシェアハウス、6次産業化や木工・ITを使った製造等、特徴のある事業者が増え、交流拠点が生まれています。移住後や地域おこし協力隊の卒業後の仕事として起業・継業を考える方も多く、農山村での起業支援のための人材育成が求められています。また、大学進学等で町外へ出た若者の多くが都市部に定住することで地域の過疎化に拍車をかけています。若者が地域に関心をもち、農山村で暮らすことの豊かさや意義を伝えていくことが、将来の還流人口（Uターン）に繋がると考えます。

このようなことから、農山村で「なりわい」を創業しようという若い世代を応援するしくみとして、大学等の教員及び紀美野町内外の先輩事業者等による全15コマの講座（座学）と、先輩事業者のもとでの6～9日のインターンシップ（実践）から構成される、「きみの地域づくり学校」を令和5年度から開校しました。関係人口・還流人口の創出や、地域おこし協力隊の起業・定住支援、行政職員のリスクリング等を目的に、地域の価値を若者に伝え、活力のある地域を創出することを目指しています。これまでに、農山村地域での起業や農業に関心がある若者世代や、紀美野町への移住検討者、和歌山県内の地域おこし協力隊、地域づくりの学びを深めたい学生等、和歌山県内外から2年間で計95人が受講しました。

学校の趣旨に賛同いただいた紀美野町内の高校、中学校、区長会、商工業、観光業、農林業の団体や企業、有識者により「きみの地域づくり学校運営協議会」（会長：山上範子りら創造芸術高等学校長）が設立され、学校の運営を行っています。

なお、紀美野町と和歌山大学は平成28年に地域連携推進包括協定を結んでおり、本学校もその一環で和歌山大学食農総合研究教育センターとの連携により実施しています。カリキュラム検討や講師依頼等、企画・運営において協力し運営を行っています。



令和 6 年度の概要① 受講生

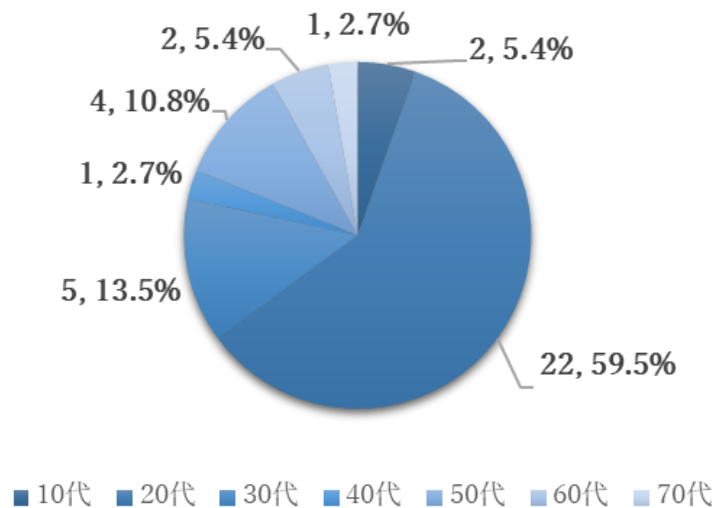
令和 6 年度は合計で 39 人に受講いただきました。そのうち 14 人は民間企業や和歌山県内 2 市町の地域おこし協力隊、行政職員、紀美野町民に参加いただきました。残りの 25 人は学生で、町内外から高校生や大学生、大学院生に参加いただきました。

講義の受講やインターンシップ、交流会等を通して、多世代による学びの場、交流の場となりました。さらに、同じ思いをもった仲間や紀美野町内の事業者などとの繋がりづくりも行え、今後の活躍が期待されます。

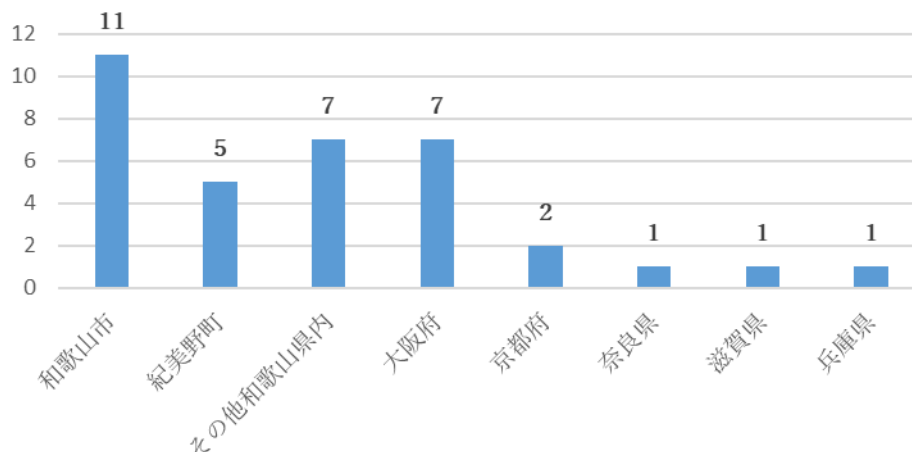
また、以下は、年代別、居住地別に見た受講生の割合です。

民間企業等	1人
地域おこし協力隊	3人
行政（リスクリング）	7人
紀美野町民	3人
大学生・大学院生	23人
高校生	2人
合計	39人

年代別 ※リスクリング 2 人は除く
きみの地域づくり学校受講生 N=37



居住地別 ※リスクリング 2 人及び高校生 2 人は除く
きみの地域づくり学校受講生 N=35



令和6年度の概要② カリキュラム

【座学編】 講師・講義内容紹介

大学等の有識者や先輩事業者・地元事業者から学ぶ講座
全15講（3講座×5回）

第1回

都市農村交流と コミュニティビジネス

5/11-12

都市農村交流と関係人口 11日

講師
藤田 武弘
追手門学院大学教授
和歌山大学名誉教授



講義内容
・対立から連携・協働へと転換する
都市農村関係
・新たな田園回帰の拡がりや地域社会の変化
・交流の鏡効果に伴う
「関係人口」の創出と「還流人口」の育成

受講生へメッセージ
付度（そんたく）しない「よそ者・若者」
の目線こそが地域のイノベーションには不
可欠です。日常のなかに埋もれた地域の価
値と一緒に掘り起こしましょう！

地域づくりから 11日

コミュニティビジネスへ

講師
木村 則夫
農業法人株式会社
秋津野 社長



講義内容
・内発的發展
・住民主体
・コミュニティビジネス

受講生へメッセージ
秋津野は、昭和30年代から地域づくり
組織を立ち上げ運営を続け、地域づくりの
持続性と発展を考え地域資源を活用したコ
ミュニティビジネスに至った経緯を学んで
もらいます。

棚田を活用した関係人口づくり 12日

講師
北 裕子
小川地域棚田振興協議会
会長
くらとくり/紀州マルイチ農園



講義内容
・「中田の棚田」再生事業の取り組みについて
・棚田再生の目的と持続可能な仕組みづくり
・観光ビジネスと地域雇用を目指して

受講生へメッセージ
今や私のライフワークとなりつつある
「中田の棚田」再生事業について、目指す「里
山農業」の魅力や未来への可能性と共に語
ります。

第2回

農林業の新たな担い手

6/1-2

農業の新たな担い手 1日

講師
岸上 光克
和歌山大学教授



講義内容
・農業を取り巻く環境変化
・農業の担い手の実態
・多様な担い手の確保

受講生へメッセージ
皆さんも実感していると思いますが、豊
かな食を支える農業は危機的状況にありま
す。特に担い手不足は深刻です。専業農家
を中心にしつつ、半農半Xのような多様
な担い手の確保は必須となります。

親元就農でのブランディングと 1日

地域との関わり方

講師
井上 信太郎
善兵衛農園



講義内容
・観光学を学び農業の道へ
・農業経営のブランディング
・地域との関わり方

受講生へメッセージ
新規就農と親元就農とは違う部分が多
くあります。その中で次世代につなぐこと
のできる農業経営を模索中です。まだ現在
進行形でいろいろ取り組んでいることがあ
りますが、その一部をご紹介しますと思
います。よろしくお願いします！

緑花木生産と新規就農 2日

講師
向 博史
向ファーム



講義内容
・移住と新規就農
・緑花木栽培の実態
・地域で暮らしていく上で大切にしたいこと

受講生へメッセージ
12年前に紀美野町へ移住し、ここに来
たなら自分で何か作って暮らしたいと思
い、新規就農で緑花木栽培を始めました。
自身の移住や新規就農の経験から、地域で
暮らしていく上で大切にしたいことにつ
いてお話しします。

第3回

「食」と起業

6/29-30

グリーン社会での農と食 29日

観光の仕事

講師
尾藤 環
辻調理師専門学校
企画部長



講義内容
・仕事の役割変化
・グリーンジョブ

受講生へメッセージ
アフターコロナの国際社会は、グリーン
社会へと大きく舵を切りました。グリーン
社会では、日本は、地域は、そして仕事は
どのように変化していくのか？みなさんと
一緒に考えたいと思います。

地域におけるビジネスモデル 29日

一資金面から一

講師
山本 真吾
(株)紀陽銀行
地方創生推進室



講義内容
・ビジネスモデルの検討
・資金計画、収支計画の検討
・資金繰りの作成、管理

受講生へメッセージ
事業を運営するにあたり大切な資金面
に関して、これから創業を検討されている方
や興味がある方に役立ち、地域活性化や移
住、関係人口の創出につながることで
あればと考えておりますので、宜しくお願い
します。

自己対話とパーパス 30日

講師
宇城 哲志
キミノカ



講義内容
・何がしたいのか、なぜしたいのか、目的と手段
・最低限の生活基盤の確立は個人の責任
・励まし合いながらなら進めても
背負っては進めない

受講生へメッセージ
最低限の経済的自立は起業の絶対条件で
す。どうやってそれを実現するのか？人生
に必要なものを基準としその優先順位を決
め、絶対譲れないもののために必要な分だ
けは自らの力で稼げる状態を作ること。そ
れができればどこでもしたいことをしな
がら生きていけると思います。

令和6年度の概要② カリキュラム

1日目 2講座

13:00～17:00

2日目 1講座

9:00～11:00

※1日目講義終了後、夕食交流会への参加および宿泊が可能です。

第4回

地域に学ぶ人づくり

8/31-9/1

「連携力」を育む地域人教育

31日

講師

牧野 光朗
追手門学院大学教授



講義内容

- ・きみに帰って来たい、住みたい、住み続けたいと考える人づくり
- ・「自己完結型」から「連携力重視型」への転換

受講生へメッセージ

一きみのを学び、きみに愛着を持った若者は、高校を卒業してもきみのとの関係を持ち続け、子育て世代になる頃には、自分の子どもはきみので育てたいと考えてきみに戻り、きみのを担う人材となる一目指すはこれ。

芸術・舞台芸術を中心においた

31日

地域人教育の実践

講師

山上 範子
りら創造芸術高等学校 校長
学校法人りら創造芸術学園
理事長



講義内容

- ・地域と学校
- ・これから求められる教育は
- ・創造芸術で何を身につけるか

受講生へメッセージ

本校は、舞台芸術、美術を教育の中心に置いて、未来をつくる「創造の力」、主体的に動く「生きる底力」を身につけていく教育を実践しています。地域社会の中での学校の在り方、激動の社会の中でこれからどんな教育が求められるのか、についてお話しさせていただきます。

森が僕らのようちえん

1日

～地域資源を活かした人づくり～

講師

西村 早栄子
NPO 法人
智頭の森こそだち舎
理事長



講義内容

- ・森のようちえんの概要
- ・ゼロからイチを生み出す方法
- ・『こそだち』にフォーカスした事業の広がり課題

受講生へメッセージ

鳥取県智頭町に惚れ込み家族で移住して18年。近所のママ友達と立上げた森のようちえんも15年を迎え、事業も予想もしなかった広がりを見せています。成功と反省の双方をご紹介します皆さんの参考になれば嬉しいです。

※本講義は時間・場所が変更になる可能性があります。

第5回

関係人口と地域おこし協力隊

9/28-29

田園回帰時代の農山村再生

28日

講師

関司 直也
法政大学教授



講義内容

- ・変化に直面する農山村の今
- ・田園回帰の中で立ち返る「なりわいづくり」
- ・共感を活かした農山村再生

受講生へメッセージ

農山村の地域社会が変化してきた背景を理解し、個人と地域を、また暮らしと仕事をつなぐ「なりわい」に着目して、先発的な地域づくりの取り組みを読み解きながら、田園回帰時代の農山村再生のあり方を考えます。

キャリアデザインと起業

28日

講師

田代 優秋
和歌山大学特任准教授
アントレプレナーシップデザインセンター



講義内容

- ・起業決心前のマインドセット
- ・What (何をやるか) よりも、Why (なぜやりたいのか) の探求
- ・試行錯誤と仮説検証

受講生へメッセージ

「起業」はあくまで自己実現のための手段なのに、しばしば目的になりがち。起業を意識してから、決心できるまでの間で何をすべきなのか、ワークショップ形式で皆さんと一緒に考えていきます。

多業田舎暮らしとゲストハウスの

29日

運営

講師

水島 千絵
Cafe & Guest House
きみの さいか亭



講義内容

- ・「どの様な生活がしたい？」が最も難しい
- ・地域おこし協力隊として移住
- ・起業～多業生活へ

受講生へメッセージ

8年前に地域おこし協力隊として移住。カフェとゲストハウスを運営しています。移住までの取捨選択、協力隊時代、地域との繋がり、起業してからの現状をお話しさせていただきます。何かのヒントになりますら幸いです。

【実践編】メンター紹介

メンターとなる事業者の現場でのインターンシップ
(10月～12月に6～9回程度)

宿泊業

[紀美野町内]

- ・美里の湯 かじか荘
- ・たまゆらの里
- ・風の古民家「うえみなみ」
- ・Cafe&Guest House きみの さいか亭



飲食業

[紀美野町内]

- ・くらくら (食堂&カフェ)
- ・ペーカリーテラス ドーシェル (パン&カフェ)
- ・きこりのピザ屋 SOMAUD- ソマウド- (ピザ&カフェ)
- ・Cafe&Guest House きみの さいか亭 (カフェ)
- ・キミノカ (ジェラート) ※内容は要相談



農業・林業・6次産業

[紀美野町内]

- ・小川地域棚田振興協議会 (米)
- ・きみのフルーツ (柑橘)
- ・(株) 上中林業
- ・和花菜園 (米・餅米・野菜等 無施肥無農薬栽培)
- ・向ファーム (緑花木生産)
- ・みさとみらいファーム (栗・梅)



[紀美野町外]

- ・秋津野ガルテン [田辺市]
- ・農業生産法人 (株) Citrus- シトラス- [有田川町]
- ・紀州柑橘 善兵衛農園 [湯浅町]

製造業

[紀美野町内]

- ・アンフィ合同会社 (博物模型専門製造)
- ・棕櫚帯製作舎 ※説明のみ



地域資源活用

[紀美野町内]

- ・毛原オートキャンプ場
- ・Katakoto Crafts (古民家リノベーション)



座学編第 1 回

【日時】令和 6 年 5 月 11 日（土）、12 日（日）

【参加者】受講生 31 人（社会人 12 人、大学生 18 人、高校生 1 人）、
スタッフ 11 人、運営協議会会員 5 人、その他（町議会議員等）6 人 計 53 人

＜開校式＞

紀美野町長 小川 裕康 挨拶

きみの地域づくり学校運営協議会長 山上 範子 挨拶

和歌山県知事代理 和歌山県海草振興局長 萩原 亨氏 御祝辞



＜第 1 講＞

「都市農村交流と関係人口」 藤田 武弘（追手門学院大学教授、きみの地域づくり学校長）

都市と農村の関係性の变化について、農業政策と観光政策の観点から整理いただいた総論的なお話に加え、日本におけるグリーンツーリズムの取り組み事例についてお話しいただきました。

受講生の感想より

- ・都市農村交流を通じて関係人口を増やすことのできる農業体験や農家民泊の重要性を再認識しました（行政）
- ・食と農が離れつつある現代で、この二つを持続的に結びつきを強めていくための様々な視点を得ることができた（大学生）



＜第 2 講＞

「地域づくりからコミュニティビジネスへ」 木村 則夫氏（株式会社秋津野社長）

田辺市上秋津地区における長年にわたる住民主体の地域づくりとコミュニティビジネスの取り組みについてご講義をいただき、両輪で地域活性を図ることの重要性についてお話しいただきました。

受講生の感想より

- ・荒れた土壌が豊かになるには時間がかかるとは正しくその通りで、（中略）事例をまのあたりにし、勇気づけられましたし、へたっては時代が過ぎていく一方であると痛感しました（協力隊）



＜第 3 講＞

「棚田を活用した関係人口づくり」 北 裕子氏（小川地域棚田振興協議会長）

中田の棚田再生のこれまでの取り組みと、多様な関わり（登録制ボランティア「棚田サポーターズ」や校外学習で関わる学生等）から関係人口が徐々にできつつある様子についてお話しいただきました。

受講生の感想より

- ・地域の人たち、地域外の人達、さまざまな人との交流の場となっていて、現代全国的に減少しているコミュニティがあり、素晴らしいと思った（大学生）



座学編第 2 回

【日時】令和 6 年 6 月 1 日（土）、2 日（日）

【参加者】受講生 29 人（社会人 12 人、大学生・大学院生 17 人）、
スタッフ 9 人、運営協議会会員 5 人、その他（町議会議員等） 5 人 計 48 人

＜第 4 講＞

「農業の新たな担い手」 岸上 光克氏（和歌山大学教授）

専業農家を担い手の中心としながらも、近年新たに位置づけられた多様な担い手の事例や、水産大
学校でのご経験を踏まえた一次産業の担い手育成の厳しさについてお話しいたしました。

受講生の感想より

- ・半林半農を実践しマルチワーカーとして歩んでいきたい（協力隊）
- ・現代において「担い手」がどれだけ必要とされており、どのような参加の方法があるのかを認識し、他人事でないと実感できました（大学生）



＜第 5 講＞

「親元就農でのブランディングと地域との関わり方」 井上 信太郎氏（善兵衛農園 代表）

「田村みかん」で有名な湯浅町田村地域において農園を継ぎ、個選農家として、販路や広報、加工等
の新しい取り組みによる農園のブランディングと、地域に人を呼ぶためのコミュニティづくりの実践
（拠点づくり、農村ワーキングホリデー、シェアハウス等）についてご講義いただきました。

受講生の感想より

- ・こんなにも夢のある農家があるのかと感じました（大学生）
- ・今はぼんやりとしたビジョンを「地元の活性化をしたい」という思いを貫くことで、地元のために何か成しとげられるような人になりたいという気持ちが強くなりました（大学生）



＜第 6 講＞

「移住と緑化木栽培と地域」 向 博史氏（向ファーム 代表）

13 年前に紀美野町に移住し、新規就農で緑化木栽培を始められた向講師から、植木や切花等の緑化
木栽培の実際について、ご経験を踏まえてご講演いただきました。また、移住者という立場から、地域
との関わりにおいて大事にしてきたことについてもお話しいたしました。

受講生の感想より

- ・どちらかというとニッチな産業になるかと思いましたが、実は経済面からみても見通しの明るそうな感じだと思います（民間企業）
- ・「凡事徹底を貫く」、「当たり前のことを当たり前に」の部分が印象に残っています（大学生）



座学編第3回

【日時】令和6年6月29日（土）、30日（日）

【参加者】受講生29人（社会人11人、大学生・大学院生18人）、
スタッフ12人、運営協議会会員6人、その他（町議会議員等）3人 計50人

＜第7講＞

「グリーン社会での農と食と観光の仕事」 尾藤 環氏（辻調理師専門学校企画部長）

国際社会や消費者の変化に着目しながら、現在の農や食に関するキーワードの意味や背景について、また、辻調理師専門学校での職業教育の取り組みの経験から感じた、国際的にみた「和食」や「和菓子」の可能性についてお話しいただきました。

受講生の感想より

・「オーガニック＝なんか良いもの」というイメージをもっていたのですが、今回のお話を聞いて、「オーガニック＝制限を設けた栽培方法」という新たな認識を得られて非常に勉強になりました（大学生）



＜第8講＞

「地域におけるビジネスモデル-資金面から-」 山本 真吾氏（株式会社紀陽銀行地方創生部）

高野山や串本等での地方創生の取り組みの紹介と、地域におけるビジネスモデルについてお話しいただきました。地域課題を地域資源を活用して解決するコミュニティビジネスの考え方を基に、融資を行う立場から起業時のビジネスプランの重要性と、その作成方法についてご講義いただきました。

受講生の感想より

・これより創業する身でありまして大変参考になりました（町民）
・ビジネスモデルを考えるにあたって創業計画を作成し、客観的な意見も参考にしつつその都度見直していくことの重要性がよくわかりました（大学生）



＜第9講＞

「自己対話とパーパス」 宇城 哲志氏（キミノーカ代表）

「雇用主・事業者」と「被雇用者・消費者」の違いに着目され、社会的に少数派である事業者になることの大変さと、必要な「目的」と「覚悟」についてお話しいただき、起業にあたっての多くのアドバイスをいただきました。

受講生の感想より

・自分の中でぼんやりとしか意識できていなかった「続けていくこと」を意識しようと感じることができました（町民）
・雇用される側の立場と雇用する立場の違いについて考えるきっかけになる講義だった（大学生）



座学編第 4 回

【日時】 令和 6 年 11 月 16 日（土）、17 日（日）

（※当初、8 月 31 日、9 月 1 日に開催予定でしたが台風接近のため延期しました。）

【参加者】 受講生 23 人（社会人 11 人、大学生・大学院生 12 人）、
スタッフ 9 人、運営協議会会員 6 人、その他（町議会議員等）6 人 計 44 人
シンポジウム一般参加者 45 人

《第 10 講》

「『連携力』を育む地域人教育」 牧野 光朗氏（追手門学院大学教授）

自己完結型人材と連携力重視型人材の違いについてご講義いただいた後に、飯田のシンボル「りんご並木」を事例にグループワークを行い、活発な議論を通して課題解決に必要な連携力や「共創の場（議論、評価、意識共有の場）」を意識した活動ができました。

受講生の感想より

- ・地域と教育機関、企業などがうまく連携できるようコーディネーターとしての力もつけていきたい（行政職員）
- ・地域内での連携や多様な関係者の協働の重要性を聞くことはあったが、それを実現するうえで「共創の場」を設ける手法まで教えていただく機会がなかったのでとても学びになった（大学生）



《第 11 講》

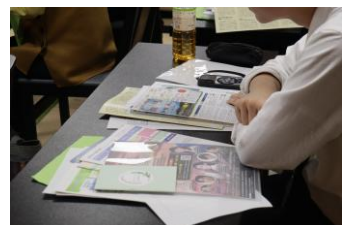
「芸術・舞台芸術を中心においた地域人教育の実践」

山上 範子（学校法人りら創造芸術学園理事長/りら創造芸術高等学校長/きみの地域づくり学校運営協議会長）

和歌山の生きた素材や自然環境を日常として暮らしながら体感してもらいたいという高校設立の経緯や、御田舞の復活や世界民族祭の開催等、普段から地域と連携されていることを知ることができました。また、紀美野へ還ってくる卒業生の存在にも触れられ、還流の芽を窺うことができました。

受講生の感想より

- ・山上先生の思いが皆に伝わり皆の心も動かされているなと感じました（行政職員）
- ・勉強する力よりも、生きていく力、人として立派に育つことがその後の人生が豊かになるかを左右するのではないかと思います（大学生）



シンポジウム「【地域×教育】いま子育て世代が地域に求める教育とは？ - 教育移住の視点から -」

《基調講演/第12講》

「森が僕らのようちえん～地域資源を活かした人づくり」
西村 早栄子氏（NPO 法人智頭の森こそだち舎理事長）
鳥取県智頭町の「森のようちえんまるたんぼう」を中心に、田舎ならではの子育てや教育の多様な実践を通して「こそだち」の選択肢を広げて来られた、これまでの活動についてご講義いただきました。

受講生の感想より

- ・都会で住む親が子どもの教育や子育てのために住まいを変えてまで「そこに行かせたい」ということに最も驚きがありました（行政職員）
- ・子どもの意見・意思を大切にし、個性を伸ばすことができる環境の大切さを学びました（大学生）

《パネルディスカッション》

テーマ：教育移住を念頭に置いた「地域の教育の可能性」、
「子育て世代が今、地域の教育に求めるものは？」

パネリスト：西村 早栄子 氏 山上 範子

仙石 恭子 氏（一般社団法人うつほの杜学園設立準備会代表理事）

奥野 絵美 氏（鳥取県庁政策戦略本部とっとり未来創造タスクフォース係長）

ファシリテーター：藤田 武弘（追手門学院大学 教授/和歌山大学 名誉教授/きみの地域づくり学校長）

前半では、認証制度を通して森のようちえんを支援してきた鳥取県、1人でプロジェクトを立ち上げ、地域住民等の多数の協力を得ながら、田辺市中辺路に探究型グローバル小・中学校を来年度設立予定の「うつほの杜学園」、紀美野町で美術や舞台芸術を中心に生徒主体の教育に18年間取り組まれてきた「りら創造芸術高等学校」のそれぞれの紹介をいただきました。後半では、子育てや教育に携わる実践者として、また、子育てをされている親としての双方の視点から、「地域の教育の可能性」と「子育て世代が地域に求める教育」について、パネリストから活発に多数の意見をいただきました。



座学編第5回

【日時】令和6年9月28日（土）、29日（日）

【参加者】受講生 29 人（社会人 11 人、大学生・大学院生 17 人、高校生 1 人）、
スタッフ 10 人、運営協議会会員 4 人、その他（町議会議員等） 3 人 計 46 人

＜第13講＞

「田園回帰時代における農山村再生」 関司 直也氏（法政大学教授）

田園回帰と農山村地域が注目されてきている背景と小商いや新事業が継続的に生み出されてきた先発地域の事例をお話いただき、農山村再生のプロセスや地域との関わり方等、農村での創業や地域づくりに携わるにあたってのヒントを与えていただいた講義でした。

受講生の感想より

・五城目の女性たちの自分の興味のあることをシェアできる、実現のための後押しができるという地域でゆるやかに仕事をおこす方法であればいろいろな地域でも受け入れられやすいと感じた（大学生）



＜第14講＞

「キャリアデザインと起業」 田代 優秋氏

（和歌山大学アントレプレナーシップデザインセンター講師）

起業の事業内容ではなく、人生の選択としての起業に着目し、起業の決心にあたっての判断材料を色々と提供いただきました。また、ワークを交えながら和気あいあいとした講義になりました。

受講生の感想より

- ・まず自分が何をやって行きたいのか知るために、地元地域のことを知りたい、目指す理想的な活動をしている人を見つけ話しを聞いてみたいという思いが強くなりました（大学生）
- ・グループワークを通して、様々な価値観の人がいるということを実感し、多様な考えに触れることも自分にとってはまだ不足しており、大切なことであると思った（大学生）



＜第15講＞

「多業田舎暮らしとゲストハウス運営」 水島 千絵氏

（Cafe & Guest House きみの さいか亭 代表）

地方移住の決断から地域おこし協力隊を経て起業するまでの経緯についてお話しいただきました。ゲストハウスとカフェの運営、お弁当販売、農業アルバイト等、「多業」の暮らしを知ることができました。

受講生の感想より

- ・地域にとけこむという点でも、多業という点でも、協力隊として理想の形ではないかと思う（協力隊）
- ・多業暮らしをされている水島さんに感心すると同時に、自分もそのような暮らしを体験してみたいという興味も湧きました（大学生）



実践編（インターンシップ）

【期間】令和6年10月1日（火）～12月31日（火）

【場所】各受入事業者による

【受入事業者】7事業者

【参加者】受講生11人（社会人3人、大学生・大学院生8人）

【内容】

メンターとなる先輩事業者のもとで事業の実務等について学び、創業・継業のイメージを膨らませていただくことを目的に、希望する受講生がインターンシップに取り組みました。現場での作業体験や事業説明に加え、メンターには受講生からの疑問・相談にお応えいただく等、短期間ではありましたが、受講生にとって、各業種の働き方への理解を深めるとともに、今後必要となるスキルや考え方等について学びを深めていただく機会となりました。

NO	事業者	詳細
1	風の古民家「うえみなみ」（宿泊業） 標高300メートルの山の中に建つ、築300年の登録有形文化財の古民家で、1日1組限定の宿を運営。一棟貸しのログハウスも運営。	1人（地域おこし協力隊）／3日 宿泊準備や片付け、イベント時の手伝い等
2	Cafe&Guest House きみの さいか亭（宿泊業・飲食業） 土日祝のカフェ（和菓子とドリンク）営業と月曜日のテイクアウトお弁当販売に加え、1日1組1棟貸しのゲストハウスを運営。	1人（大学生）／6日 宿泊や食事の準備と片付け等
3	きこりのピザ屋SOMAUD（飲食業）／ 株式会社上中林業（林業） 家や電線等にかかる支障木を切り落とす特殊伐採を行う「上中林業」が、切り落とした木材を活かすために週末限定のピザ屋を運営。	2人（地域おこし協力隊、大学生）／5日程度 ピザ屋での調理補助、特殊伐採の見学や作業等
4	小川地域棚田振興協議会（農業） 600年以上の歴史をもつ「中田の棚田」の美しい自然と農業文化を次世代に残すために、棚田の再生や維持管理、ワークショップ等に取り組む。	1人（大学院生）／7日 稲刈り、田んぼの整備等
5	KATAKOTO CRAFTS（建築業） 建築デザイン・施工・コンサルティングを行う。加えて、シェアハウス「Shared Residence FLAG」を運営。宿泊事業の準備も進めている。	1人（大学生）／2日 古民家改修やシェアハウス宿泊棟等の施工等
6	秋津野ガルテン（農業） 農家レストランやカフェ&スイーツ体験工房、宿泊施設、サテライトオフィス等がある複合型の体験型グリーンツーリズム施設。	3人（行政職員、大学生）／4日程度 柑橘類の袋掛けや収穫等
7	農業生産法人 株式会社Citrus（農業） 柑橘（温州みかん、晩柑）栽培や、果実・野菜の乾燥加工を行う。加えて、農業研修生を受け入れる等、農業後継者育成にも取り組む。	2人（大学生）／4日 みかんの収穫等



第2回修了式

【日時】令和7年2月24日（月）13時30分～15時30分

【場所】紀美野町総合福祉センター 3階多目的ホール

【内容】

修了要件（※）を満たした受講生に修了証書を授与しました。今年度の受講生39人のうち修了生は22人（うち、実践編修了は10人）でした。また、受講生の代表者による1年間の成果発表や、2年間の受講を機に町内の取り組みから「関係人口」について調査研究された大学生による研究発表が行われました。当日のプログラムについては下記をご参照ください。

第2回
きみの地域づくり学校修了式

2025
2/24
月・祝
13:30 — 15:30
(13:00 開場)

きみの地域づくり学校では、農山村地域での「なりわい創業」について、座学と実践の両面から1年間かけて学んできました。修了式では、修了証書授与とともにその集大成となる成果発表を行います。
また、きみの地域づくり学校で2年間学んだことをきっかけに、紀美野をテーマに卒業論文を執筆された大学生2名による研究発表も行います。
学びを活かし、それぞれの立場で次なる第一歩を踏み出そうとする修了生たちの晴れ姿をぜひご覧いただけたら幸いです。

会場 紀美野町総合福祉センター
3階 多目的ホール
(和歌山県海南郡紀美野町下佐々1408番地4)

申込方法 申込フォーム、FAX、電話でお申し込みください。
申し込み内容は裏面をご覧ください。
※何らかの支援や情報保障が必要な方はお問合せください。

会場MAP

お問合せ・申込先
きみの地域づくり学校運営協議会事務局
〒640-1243
和歌山県海南郡紀美野町神野市場226-1
紀美野町役場まちづくり課内 担当：山本、中谷、藤井
TEL 073-495-3462 FAX 073-495-3334
E-mail support@kimino-cds.org

【主催】きみの地域づくり学校運営協議会
【共催】紀美野町、和歌山大学食農総合研究教育センター
【後援】和歌山県

プログラム	
13:30	開 会
	修了証書授与
	受講生成果発表
	「きみの地域づくり学校で学んだことと今後の展望」
	一 般 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 武田 浩卓 氏
	リスギリング 紀美野町役場総務課 佐竹 真由 氏
	紀美野町民 認定NPO法人ふるさと回帰支援センター 増山 佐恵加 氏
	地域おこし協力隊 紀美野町地域おこし協力隊 海津 由布子 氏
	大 学 生 和歌山大学観光学部 宮下 咲良 氏
	講 評
	きみの地域づくり学校運営協議会長 山上 範子 風の古民家「うえみなみ」代表 南出 典子 氏
14:40	休 憩
14:45	学生研究発表
	「棚田保全にみる関係人口の形成プロセス」 追手門学院大学地域創造学部 小野 真之祐 氏
	「持続的な地域づくりのための関係人口創出事業と人材育成」 追手門学院大学地域創造学部 橋田 真南翔 氏
15:30	閉 会

※修了要件は下記のとおりです。

【座学編】座学編（全15コマ）に6割（9コマ）以上ご出席の上、座学編レポートを提出された方に「座学編修了証書」を授与いたします。

【実践編】実践編を受講し、座学編・実践編双方のレポートを提出された方に「座学・インターンシップ修了証書」を授与いたします。

座学編

修了レポート

テーマ

「座学編で学んだこと」

今回、2期目の地域づくり学校に参加することになったのは、強い意志を持ってというより、誘われたことがきっかけでしたが、結果として得るものが非常に多く、充実した時間となりました。1期生として参加した時には、移住検討者という「お客さん」の立場でしたが、今回は移住者として当事者意識を持ちながら、より具体的に自分の課題や地域の可能性について考えることができました。

特に印象に残ったのは、「他者を巻き込むことの大切さ」です。これまで、全てを自分で行うことが理想だと思い込んでいましたが、それが必ずしも最善ではないことを実感しました。適材適所で他人の力を借りれば、結果として一人では成し得ない成果を得られる場合があります。「自分がやれば百点」と思い込むのではなく、「誰かと共にやることで百五十点を目指す」という考え方に気付かされました。地域づくりにおいても、個人の力だけでなく、住民や周囲のサポートを得ることでより良い結果を生み出せると確信しました。

また、1期での講義を振り返りながら、新たな発見や学びを得たことも大きな収穫でした。特に、林業についての興味を深め、紀美野町で開催された自伐型林業講座に参加した経験は、私自身の山の管理に対する意識を変えるきっかけとなりました。この講座で得た知識を活かし、地域資源をどのように活用していくかを考える手助けとなりました。

さらに、棚田サポーターとしての活動を通じて、地域とのつながりを深めることができました。田植えや稲刈りといったイベントだけでなく、草刈りや石積みといった実践的な作業を通じて、棚田の現状や地域の課題に触れることができました。これらの経験を通じて、地域の魅力や問題点を具体的に理解し、自分自身が地域の一員として何をすべきかを考えるようになりました。

講義では、具体的な事例を基にした地域づくりの手法や課題が紹介され、自分のビジネスにどのように活かせるかを学ぶことができました。1期の頃は「カフェでも開こうか」という漠然とした夢想でしたが、2期では土地家屋の売買や店舗改修を進めつつ、より現実的かつ具体的な創業プランを練ることができました。講師の先生方のアドバイスや他の参加者の意見が、自分の計画を大きく前進させてくれました。

今後の目標は、紀美野町の特性や魅力を活かしたユニークなカフェを立ち上げ、地域と共に成長することです。地域づくり学校で得た知識や人とのつながりを大切にしながら、実現に向けて努力していきます。講師の皆様や事務局、参加者の方々への感謝を胸に、地域に貢献しながら自分自身も成長し続けたいと考えています。

今回で2期目となった地域づくり学校。2回目の参加で再び多くの学びを得ることができました。その中でも特に、「仲間の重要性」「一步を踏み出す勇気」「コミュニティの大切さ」を学びました。

1期目の初めての交流会で「そろそろ紀美野町で何かできることがないかと考え参加しました」と自己紹介をしてから約2年が経ちました。私自身、和歌山県の移住相談から始まり、全国の移住定住に係る事業に約8年携わってきましたが、地域コミュニティの大切さ、農村地域の課題と可能性など、地域づくり学校で学んだことは現職でも個人としても大変役立ちました。

この学校で学んだことは、知識だけではありません。地域づくり学校という場で大切な仲間ができたことは、私の人生にとって大きな転換点となりました。紀美野町で何ができるのか、何をしたいのかを模索し続けた2年間。2期目の今回は、仲間ができたことで、その一步を踏み出すきっかけをもらいました。

来年度からは、農業と民泊に携わっていければと考えています。まだ動き始めたばかりで、今後どうなるかは未知数ですが、いつかこの町で地域の総合商社のようなものを作り上げられたら…。そして雇用を創出できるような事業に育てていけたら…と考えています。そう思えるようになったのは、農村や農業、食、地域コミュニティ、教育など、多角的に地域を学ぶことができたこの学校と仲間があってこそです。大きな夢で、実現までには何十年もかかるかもしれませんが、動かなければ何も始まりません。それもまた、この学校で実践者の皆様から学んだことの一つです。今はまだ笑われてしまうような大きな目標かもしれませんが、小さな一步を踏み出す勇気をくれたこの学校と仲間に、心から感謝しています。まずは、第5回の講義でお話してくださった水島講師のような多業をしつつ、農業を学び始め、民泊を軌道に乗せるところから、一步一步形にしていきたいと考えています。

さらに、地域づくり学校で多くの先生方が異口同音に語られていた「コミュニティの大切さ」。地域外で働いていた私にとって、まだまだコミュニティとの繋がりがしっかりしているとは言えない部分もあります。これからは地域の皆さんの想いや考えを大切に、コミュニティとの繋がりを深めていきたいと考えています。

紀美野町に移住して8年。小学生だった子どもたちも大人になりつつあります。今、このタイミングで動き出すきっかけをくれた紀美野町という町に、いつか少しでも恩返しできる人材になればと、新たな想いで来年度を迎えることを楽しみにしています。

地域づくり学校で得られる学術的な広い視点からの学び、全国各地で実践されている皆さまの学び、そして紀美野町という地域で実践されている方々の学び。この3つの視点を通じて、一つのテーマを体系的に学べる機会はなかなか得られません。様々なテーマで地域の課題と可能性に向き合える地域づくり学校。常に広い視野を持ち続けるためにも、来年度もぜひこの学校に参加できればと思っています。

きみの地域づくり学校座学編を受講して

本学で学ぶのは2年目となり、地域の方々との縁も濃くなったことで、本学の意義を改めて認識するとともに、開校初年度を知っている身としては若干熱量の低下を感じたのも事実です。一般受講生が減った（昨年が多すぎた？）影響なのか、その他の要因なのかはわかりませんが、次年度の開催もあるものとして、授業の感想そっちのけで今の思いを記すこととしました。

まず、昨今の学生や若者の中には、今の行き過ぎた感のある資本主義、あるいは大多数が会社員になることを当たり前としてきた社会構造に少なからず閉塞感を感じ取り、その一環から田園回帰に向かっているのでは、と勝手に思っています。いや、都会で疲弊した中高年もまた同じかもしれません。

そんな背景を前提として、世間では移住、二地域居住、関係人口、グリーンツーリズムといった様々な関係性を田舎と持つことが豊かさの一つの答えのような感じになっているのではということまで学んできました。

そこで、紀美野町の立ち位置です。関西都市圏の周縁に位置しつつ世界遺産とも隣接する素敵な場所ですよね。本地域づくり学校を入口として移住された方もおり、また今もここに住みたいと思っている方々も居るでしょうから、学びを経て移住または関係人口に属することへの本学の意義は十分にあると思っています。

そんな中、学生が学び、知識を取得、刺激を受けても、卒業就職して縁が切れてしまうという流れはまだまだ崩せない感じでしょうか。まあ、若者にいきなり農業しろ、移住して地域を支えろと言うのもかなり乱暴ですし、お前がやればと言われてもなかなか踏み出せない、これまた無責任なものです。

そこで次年度ですが、まずは、地域づくりに関わり学んでいる学生目から見た地域の良さ、課題を別途なんらかの形で調査・分析・発表してもらってはどうかと考えています。図司先生もご自身が学生時代にフィールドに出て活動するところから始まったとお話されており、せっかく目の前にフィールドがあるのに、わざわざ紀美野まで足を運ぶ学生が課外活動を行わないのは少しもったいないと思っています。そんな活動の成果を是非年度末にでも聴いてみたいと個人的には思います。ここで掘り起こされた町の良さ（財産）、課題（需要）が次の仕事の芽になると思うので、それを活かすのは学生自身かもしれないし、移住希望者かもしれないし、町民かもしれない。そんな熱いものを見せられて本学に関わる大人が動かなければ学生から切り捨てられるくらいの思いは持つでしょう。ここから生業が生まれると、翌年、その翌年と学生が生み出す地域づくりの一つの流れができるのではとも思います。この活動に地域の大人の支援、意見、助言、協力などが加われば、面白い流れができるのではないのでしょうか。

授業の感想そっちのけで思いつきを一人語りしてしまいすみません。次年度もこんな風にいろいろ考え実践していきたいので、是非刺激になる授業をよろしく願います。

① 参加講義について

私は今回の地域づくり学校に地域おこし協力隊として参加した。大きなテーマは、「関係・交流人口」「地域との関わり」である印象を受けた。いずれも過疎地域が魅力を発信するために必要な視点を参加者に提示する内容であった。

② 講義内容からみえる本町の魅力と課題点

今回の講義内容を合わせて考える本町の魅力は、外部からの新しい風を許す土壤があることであると考えている。

本町は20年以上前、まだ移住定住という言葉が一般的ではなかった時期から移住者や新規事業者を受け入れてきた。地域独自に移住促進について活動していたという長谷毛原地区や、りら創造芸術高校を擁する真国地区もその一例である。移住者同士のコミュニティも、地域住民も関わる形で初期から運営されてきた。地域おこし協力隊に関しても、他市町と比べかなり早い段階で導入されている。そのような初期からの風潮が、新しいことに対する拒絶感の少なさ、寛容な雰囲気を生んでいると感じる。農村コミュニティとは周囲との密接な関わりが必要で、閉鎖的な側面は持ち合わせてもいる。前提として移住者側の地域への理解の姿勢や活動参加は必須のものである。

一方で、外部の方が感じている本町の魅力や彼らの活動を地域住民と共有することが課題であると感じた。難しいと思うが、そのような機会が創出できないものかと思案するところであるし、地域づくり学校はその可能性をもっているとも感じている。

③ 協力隊と地域の関わり方

協力隊と地域の関わり方について、特に第5回第1講の図司直也講師の講義に大きな感銘を受けた。事例として紹介された、協力隊が地域住民と協力し夏の行事である盆踊りを「ビアガーデン」とすることで存続・継承したというものである。

「伝統を残す」という視点でみたときに、この事例はまったく対称の2つの見方をすることができる。形式が継承されない「変容」という見方と、人が集まる場という行事の本質を継承した「存続」という見方である。形式と本質のどちらを「伝統」と捉えるかという課題は無形文化財保存において尽きないものであるが、その主導権は常に地域住民にある。

この事例において重要なのは、その意思決定に外部の人間である地域おこし協力隊が関わったという点である。このような地域の根幹に関わることは地域住民と協力隊の間の時間的な関わりの深さと広さ、お互いの信頼関係、自治体の的確な関係構築と連携への助けがなければ成し得ない。図司講師は地域との関わりの深さがその後の定住率に関係していることも示され、定住を見据えた制度である協力隊員と地域の関係性として理想的なひとつの形だと感じた。

④ 地域づくり学校への所感について

地域づくり学校の講義において、事業事例や地域のもつ可能性について知見を深めてきた。実際に話を

聞くことで得られる学び、人脈をつくるという利点はとても大きいものである。

一方で、その事例を自身の活動に活かすことへの難しさについて考えた。これは起業や移住を前提として参加されているほかの参加者でも同じことがいえる。成功事例においては環境的要因が必ずしも同じではない。そのことを念頭に置いて、自身の活動・市町であれば、どの要素をどのように活かすかという視点が、成功事例を参考として学ぶ上では欠かせない。その方法は参加者次第であるのだが、学ぶ場としてはその視点の提起や議論は、会の意義を深める要素となるのではないだろうか。

最後に、講師の皆様に貴重なお時間をいただき、お話をお聞かせいただいたことへの感謝と、そのような機会をつくってくださった事務局の皆様への感謝をお伝えして、座学編の修了レポートとする。

きみの地域づくり学校座学編は第1講から第15講まですべて受講させていただきました。

第1講「都市農村交流と関係人口」では教育は大切で農業での食育のように林業での木育をやっていたいと思いました。我々地域おこし協力隊が施業した森林環境を木育に利用していくという流れを作り出せたらいいと思います。

第2講「地域づくりからコミュニティビジネスへ」では林業も木材をできるだけ地域で処理できるようにしたいと思いました。地域資源の木材を活用する環境を整えるため、小さなことから着手していきたいと思います。

第3講「棚田を活用した関係人口づくり」を受講後に実際に棚サポのメンバーとなり草刈り作業をさせていただきました。いつもメンバーは紀美野町外の遠方から来られており関係人口づくりになっていると確信しました。棚田でできたお米もおいしくいただきました。

第4講「農業の新たな担い手」では環境と調和のとれた農業をして半林半農のマルチワーカーになりたいと思いました。多様な担い手の一員になりたいと思います。

第5講「親元就農でのブランディングと地域との関わり方」では林業もブランディングできたらいいと思いました。市場へ直結できたらもっと林業にもやりがいを持てると思います。また木材を販売するだけではない林業の必要性も感じました。

第6講「移住と緑化木栽培と地域」では地域で暮らすことについて考えました。最後まで農業をするという志は見習いたいと思います。

第7講「グリーン社会での農と食と観光の仕事」では Soul（こころ）、Body（からだ）、Nature（しぜん）、Relationship（つながり）を大切に生きていきたいと思いました。「地元のものでおいしいものをつくる」が基本にありそれが観光業にもつながっていくことを知りました。

第8講「地域におけるビジネスモデル—資金面から—」では地域ネットワークとして必要なネットワークを組むことが大切であるということを理解しました。創業計画（ビジネスプラン）を作成し何度も繰り返し確認し継続可能性を高めていくことを学びました。

第9講「自己対話とパーパス」では自営業について深く考えました。覚悟と目的が自営業には必要で、これから自立して続けていける営みを見つけたいと思いました。

第10講「【連携力】を育む地域人教育」では自分では何ができないのかを客観的に把握し、できないことを補うパートナーを探し、そのパートナーと連携して課題解決を図るという自己分析力、人材ネットワーク構築力、連携力の必要性を理解しました。課題を見つけた時に「当事者意識」を持ち、議論する「共創の場」を設置し、課題意識を共有化することが必要で、連携力を育てていくことの大切さを学びました。

第11講「芸術・舞台芸術を中心においた地域人教育の実践」では地域を愛することがあって教育につながっているということを知りました。学校に行かない子供が増えている現在の教育システムを変えていってほしいという熱い思いを感じました。

第12講「森が僕らのようちえん～地域資源を活かした人づくり～」では森林は林業をするだけでなくようちえんにも使えるということを知りました。紀美野町でも自伐型林業で施業した場所で森のようちえんが出来たらいいと思います。

第13講「田園回帰時代の農山村再生」では時代にふさわしい新しい価値を地域から内発的に創り出し地域に上乘せしていく作業が地域づくりの考え方と理解しました。田園回帰は若者の方が対応力はあるようですが、高齢者でも何かできると思います。

第14講「キャリアデザインと起業」では、起業するときはスモールスタートし、仲間の存在が大切で

あることを理解しました。またやってみたいことを振り返ってみることも大事だと気づきました。

第 15 講「多業田舎暮らしとゲストハウスの運営」では多業スケジュールのやり方を学びました。また別の分野の方の意見・感想を聞くことも必要とのことでたいへん参考になりました。自分も半林半 X、多業することを目標に実践していきたいと思います。

座学編のカリキュラムにより多様な講師の多様な講座を受講することができました。これら企画・運営された皆さまに深く感謝申し上げます。

きみの地域づくり学校は、地域おこし協力隊の起業・定住支援も目的にしているので、これから紀美野町での「なりわい」を見つけて定住できるようにしていきたいと思います。

きみの地域づくり学校全5回15コマの講義を通して、様々なことを学ぶことができた。各回で得た学びは次のとおりである。

第1回の講義では、都市農村交流とコミュニティビジネスについて学んだ。藤田講師からは、都市と農村の関わり方の変化について、木村講師からは、田辺市秋津野における地域づくりの歴史について、北講師からは、中田の棚田再生活動の取組について、それぞれ学ぶことができた。

第2回の講義では、農業の新たな担い手というテーマについて学んだ。岸上講師からは、農業の担い手の現状と新たな担い手の確保のための視点について、井上講師からは、ご自身が実践された挑戦的な農家経営について、向講師からは、移住者の視点から新規就農について、それぞれ学ぶことができた。私の実家もみかん農家であり、井上講師の話は、とても興味深く勉強になった。

第3回の講義では、「食」と起業について学んだ。尾藤講師からは、地域に根ざした食の価値について、山本講師からは、紀陽銀行の地方創生の取組と創業支援について、宇城講師からは、独立起業する覚悟について、それぞれ学ぶことができた。

第4回の講義では、地域に学ぶ人づくりというテーマで学んだ。牧野講師からは、連携力重視型人材の重要性とその育成について、山上講師からは、りら創造芸術高等学校が実践している地域人教育について、西村講師からは、鳥取県智頭町における森のようちえんの取組について、それぞれ学ぶことができた。

第5回では、関係人口と地域おこし協力隊について学んだ。図司講師からは、地域おこし協力隊と農村再生について、田代講師からは、起業前のマインドの整理について、水島講師からは、地域おこし協力隊を経てからの起業について、それぞれ学ぶことができた。

以上がきみの地域づくり学校の各回の講義で特に得た学びであるが、今年の講義の中でもっとも興味深く印象に残ったのは、西村講師による森のようちえんについての講演であった。

まず、園舎を持たず、毎日森に入っていくということに衝撃を受けた。雨の日でも雪の日でも関係なく森へ行くというのだから驚きである。昨今は、子どもの安全性が絶対視され、一度事故が起これば施設の責任問題として全国ニュースに取り上げられることがしばしばである。このようなご時世に、囲われた安全性とは真逆の位置にある、森という制御できない空間での保育が可能であるという事実と、それを望む保護者の需要も多いということが驚きであった。

また、個人所有の山に入ったり、里道の真ん中でお弁当を食べたりすることができるということについて、地区の協力がしっかり得られているということにも驚いた。やはり、地区の理解があってこそその取組であると感じた。

そして、一般的な園舎での保育よりも、森のようちえんのほうが、園児の高次神経活動が活発になるという研究結果にもまた驚いた。森のようちえんの取組には、行政による財政的支援が重要だと公演の中で学んだが、森のようちえんでの保育が発達により良い影響を与えるというエビデンスは、森のようちえんの理解を広めるために重要だと感じた。

さて、紀美野町でも豊富な山林を活用して、森のようちえんのような特色ある保育を展開することはできないだろうか。もし可能であるならば、県下一の子育て支援をより推進できると考える。

行政職員として、紀美野町が力を入れる取り組みについて知ることや、そこに参加される今後紀美野町で起業される方や移住を希望されている方、関係人口となりうる方と接点を持ちたいという動機から今回参加させていただきました。

第2回となるこの地域づくり学校に参加させていただき、様々な講義で学びを得る中で、最も印象に残ったのは、第9回でお話をしてくださった「キミノーカ」を運営されている宇城講師の講義でした。「農山村でのなりわいづくり」という割と大きなテーマの中で、もともと民間企業にお勤めされていて、そこから起業するに至った経緯や、起業する中でご自身が歩まれてきたこと、そして事業の継続していくために行ってきたこと、実績をもとに、具体的かつ現実的にお話をしてくださった印象があります。起業への思いや、その後の成功事例はもちろん大切ですが、実体験をもとにしたお話をしていただいた講義後の質疑応答にて、「宇城講師は計画的に起業やその後の取り組みを行っていたのでしょうか。」といった質問に対し、「実はそうではなかった。」という答えがあったのも印象的で、この体験をととても分かりやすく伝えてくださったことにありがたいと感じました。そして、私自身が行政職員として、このまちで起業したい、新しいことをしたいといった思いを持った方をサポートさせていただく機会が今後あるとしたときに、この宇城講師の講義をお聞きしていることは大きな財産であると感じています。

また、台風等の影響で実質最終講義となった西村講師の「森が僕らのようちえん」のお話も印象的でした。そこで最も大切だと感じたのが、モチベーションの高さと実際に需要があるということでした。起業を含め新しいことを始める際に、それを自分自身が継続していくモチベーションの保ち方と、それがどの層に需要があるのか、需要が拡大できるのかといった観点でやるかやらないかを考えることは、一過性でなく継続的に物事に取り組むために最も必要なことだと改めて考えさせていただく機会となりました。

しかし、私が最もこの地域づくり学校で驚いた、感じたことは、この「農山村地域でのなりわいづくりを学ぶ」本学校の受講生のうちの学生の方の多さでした。学生の方の中にはリピーターの方も多く、その中には卒業後に起業したいという方もいて、初年度の講義が彼ら、彼女らの「やりたいこと」を「やってみたい」という気持ちの後押しをしていると感じました。

さらに、この学校の1日目に毎回開催される交流会がこの学校の魅力の一つだと思いました。登壇いただいた講師の方々もご参加くださり、学生の方、民間企業でお勤めの方、行政の方が一同に会す場はなかなか貴重だと感じました。交流会を通し様々な「肩書き」の方とお話をする中で、「紀美野町役場職員」という名札を付けていることから、一個人の意見ではなく、行政職員としての意見を話すべき内容かどうかと迷ったことも多々ありました。正直その場その場に応じて、適切なお話の内容はあるのが社会人かと思いますが、そのことに気付く、自身としてはどのような支援、サポートをさせていただくことができるのか、どのような姿勢が必要なのかといったある意味当たり前ではありますが、なかなか教えていただくことができないことを学ばせていただく機会となりました。

最後になりましたが、講義に登壇いただきました講師の皆さま、この学校を運営してくださっていた皆さま、様々な気付きを与えてくださった受講生の皆さまありがとうございました。

きみの地域づくり学校を受講して

私は紀美野町役場まちづくり課に勤務しておりますが、今年度採用の職員であること、また、町外出身・在住であることから、紀美野町に対する知見を深める必要があると考え、きみの地域づくり学校を受講いたしました。加えて、農山村での「なりわい」について学ぶことができ、今後の行政職員としての業務や地域貢献に反映していきたいと考え受講しておりました。

全5回15コマの講義を受講し、全体を通して印象に残ったのは、事業を営んでいる方やまちづくりに尽力している方のこれまでの経験や考え方に触れることができたことが挙げられます。

これまでの人生でどういったことが転機となって、どういった考えでその活動を始めたのか、取り組みの中で苦労した点といった事例を知ることができました。また、苦労した点をどのようにクリアしていったかも学ぶことができたため、今後、類似した活動に取り組んでいる、もしくは取り組もうと考えている方に出会った際には、今回の講義内容を活かして、役場職員としてサポートしていきたいと考えております。

一部の講義では隣の方との意見交換やグループワーク等も実施しておりました。日常の業務では関わることの少ない地域の方々と、大学生と議論を行うことができました。自身とは異なった視点での考えや、到底思いつかないようなアイデアに触れることができ、自身の成長につながれたと感じております。また、講義の一環としての議論・意見交換だけでなく、講義後に開催される交流会でも、他の参加者と交流することができ、講義とは無関係な内容についても雑談や意見交換を行うことで、繋がりを作り、親睦を深めることができました。交流会については参加できない回が多かったため、次年度も受講できれば、より多くの交流会にも参加し、多様な意見の収集や地域の参加者との繋がり構築に努めたいと考えております。

きみの地域づくり学校では、町内で活躍する方の考え方や農山村での「なりわい」について学ぶ目的で受講し始めましたが、想像していた以上に詳細で多くの物事を学ぶ機会になったと考えております。きみの地域づくり学校を通じて学んだ内容や地域の方々との繋がりを活用して、関係人口・還流人口の増加・地域の活性化に取り組んでいく所存であります。

昨年度に引き続き 2 年目の受講である今年のきみの地域づくり学校では、座学で学んだことを実際にどう活用していくか具体的に考えることを意識した。

どの講義も自身にとって非常に学びの深いものであったが特に印象に残っている講義が西村さんの地域資源を生かした森のようちえんの実践に関する講義である。近年、森林利用に関して森林が有する多面的機能が注目されておりその機能を発揮するために森林資源の適正な管理・利用が求められている。そのなかで森林資源の利用として森林環境教育活動(木育)に注目が集まっており、全国的に普及啓発活動が推進されているが森のようちえんはまさに先駆的な活動例である。90%以上が森林である智頭町の豊かな地域資源をこどもの個性を伸ばしてたくましく成長させたいという保護者のニーズと組み合わせ運営している智頭の森こそだち舎は、時に移住を促進させ地域人材の確保に貢献するとともに幼児期から木材の良さや利用意義を知ってもらう機会を積極的に提供している。幼児期の体験(遊び)を通じた学びは発育に大きな影響を及ぼすため、幼児教育の中身を重視することは非常に重要な観点である。その為、こどもたち自身で考え主体性をもって生活するシステムを構成する森のようちえんの取り組み内容はこどもたちを第一に考えながら地域の良さをふんだんに活用していく事例であることを学んだ。和歌山県はもちろん、森林資源を豊富に有した地域は全国各地に存在している一方で、このように実践的に森林資源を教育活動に展開させている取り組みは多くない。こういった講義で森林資源活用の重要性を座学で学び終了するのは非常に惜しく、実践に向けたネットワークの形成が重要ではないかと感じた。先駆的に活動を進めている方を軸に自治体やこれから活動を検討している事業者、教育機関、そして地域住民など広く関係人口を巻き込むことで活動の幅が広がっていくと考えている。特に大学をはじめとした教育機関の連携があることで地域活性化や幼児教育に興味関心が向いている大学生のフィールドワーク先として地域が活用され双方にとって有効的な場として森林教育が使われるようになることを私は期待している。

もちろん森林教育以外にも様々な領域の講義を聞くことが出来中には自分が今まで学習してこなかった知見を広げることが出来た甲斐もあり毎回非常に有意義な時間であった。

様々な事業者様の講義を聞いて自営業をする適正は正直実感することが出来なかったが、当事者意識をもって自主的に行動しなければいくら地域をよくしたいと思っていてもかなわないことを痛感した。自由に行動できる学生のうちにできることを考えてボランティアなど小さなところから地域に関わる取り組みを継続していこうと思った。

まず、私がきみの地域づくり学校に参加した理由は、地域づくり、まちおこしに興味があるため、大学の講義に加え、他大学などの教授や紀美野町内外の事業者さんの話を聞きたいと感じたからである。思い描いている理想のやりたいことの解像度を上げ、これから何に取り組んでいくべきかを見つけようと心がけ講義を受けた。

座学では都市農村交流とコミュニティビジネス、農林業の新たな担い手、「食」と起業、地域に学ぶ人づくり、関係人口と地域おこし協力隊と分野ごとに講義を受けた。全体を通して、私自身が地域に関わっていく時に、「地域のことを深く知る」、「支えたい、活性化させたいと思う地域で当事者として事業を起こすことで同じ目線で活動できる」、「自分事を起点としてやってみたいことから一步踏み出す」ということを特に大事にしようと考えた。地域のことを深く知ることは、魅力を発信する上で必要不可欠であり、地元住民の理解と協力を得られやすいと考える。地元住民でも地元の魅力を十分に知らない人が多い。小さい頃から地域教育を受けることで愛着や誇りが芽生え、地元を離れる若者を減らすことに加えてUターンを増やすことにもつながると考える。また、近年外食の習慣が拡大し、食と農のつながりが薄くなっていると考え。特に農村地域においては、農に関心を持ってもらうことのできる活動が急がれると感じた。支えたい、活性化させたいと思う地域で当事者として事業を起こすことで同じ目線で活動できることは、実際に活動しないと見えてこないことの方が多く、地域の人と良好な関係をつくることにもつながり、周りを巻き込んだ活動を行えると感じた。また、同時に自営業を行うとなると、想像していなかったほどの多くの責任と義務がつきまとうと知った。情報収集や起業の運営以外の事務作業が必要になってくる。強い覚悟が必要と現実を突きつけられた。そんな時、自分事を起点としてやってみたいことから一步踏み出すという言葉に、今から何か行動を起こさなければならないと焦るのではなく、自分がそこまでの覚悟を持ってまでもやりたいと思えることは何なのか具体的に見いだすことが重要であると感じた。そのために、地域のイベントに参加して積極的に関わったり、事業者さんの話を聞いたり、アプローチの仕方やアイデア、プロモーションなど学べることはなんでも貪欲に知っていきたい。自分のモチベーションの継続にもつながり、熱量があることで他人を巻き込むことができると感じた。

きみの地域づくり学校を通して、様々な事業者さんの突っ込んだお話を聞くことができ、まだまだたくさんの方の事業者さんとお話ししてみたい、生の声を聞きたいと感じたため、これからも積極的に関わっていこうと思う。

きみの地域づくり学校を通して、地域との様々な関わり方があり、どのような思いを持った人がいるのかを知ることができ、将来は地域活性化に尽力したいと考えている私にとって多くの学びや刺激があった。

第1回は「都市農村交流とコミュニティビジネス」というテーマでお話いただいたが、藤田教授のお話の中で、「子供の頃の農体験が将来の農的関係人口につながる」という言葉が心に残った。私は農業が盛んな土地で生まれ育ち、小学生の時に何度か農業体験をしたことがある。当時は単なる授業として体験していたが、今になって考えると、身の周りの食べ物が手間暇かけて育てられていると身をもって学んだことで、当たり前のことではあるが食べ物への感謝をもって生活できていると感じる。そのため、藤田先生がおっしゃったことに納得したとともに、地域と関わるうえで、子供たちへより良い影響のあるコンテンツを考えられる人材になりたいと思った。また、秋津野ガルテンの木村さんのお話では上秋津では長い期間をかけて地域のまとまりが生まれ、現在のような状態になるまでに多くの取り組みや挫折があったということを知り、地域を活性化していくことや何か行動を起こすときには長い目で見る必要があることを学んだ。

第2回は「農林業の新たな担い手」というテーマで農業の現状や和歌山県内で行われている一次産業の取り組みについてのお話を聞いた。岸上先生のお話では農業の担い手として専業農家だけでなく、兼業農家も誕生しており、様々な人が担い手として捉えられうるということを学んだ。情報化や工業化が進む中、農林業は最も地域との関わりが深いものであり、食は人々が生きていくうえでなくてはならないものであるため、過疎化が進む地域の再生や、その先の持続的な発展に農林業は欠かせないと私は考える。個人的には、自身が関心のある「食」を通して、地域再生に貢献したいと考えているため、農林業の地域における重要性を再確認することができ、大変良い機会となったとともに、今後も今ある想いを大切に学んでいきたいと思った。また、井上さんや向さんのように実際に農林業の分野で生産者として働いておられる方のお話を聞いて、難しさや課題だけでなく、関わっているからこそわかる楽しさややりがいを知ることができ、自分の中の一次産業に関するイメージがより良いものになったとともに、大学で学んでいる観光とどのようにしたら結び付けられるか考えてみたいと思うきっかけになった。

第3回は「食と起業」というテーマのお話を聞いた。特に尾藤さんのお話にあった「食コンテンツにおいて世界的に重視されている点を知り、料理の味だけでなく、食材が作られるプロセスや背景にある文化についても考えることが重要である」ということが心に残った。食の分野には、宗教観、倫理観など様々な要素が関係しているため、ただ生産、加工、消費するだけでなく、それらの観点から捉えていくことを大切にしたいと思った。

第5回は「関係人口と地域おこし協力隊」というテーマのお話を聞いた。現在大学2年生で、進路について考え始めた私にとって、田代先生のお話は自分の思いと向き合う良い機会となった。また、他の人との価値観の違いを感じられたことは新鮮であった。また、水島さんのお話から、苦勞の程度に大小はあれど「自分のやりたいこと」をやる人生は素敵だと感じ、私もそのように生きていきたいと思った。

きみの地域づくり学校での講義を経て、自身の視野の広がりを実感した。この経験を今後の大学での学びに活かし、将来、地元の地域再生に貢献できる力をつけていきたい。

きみの地域づくり学校を通して、私は農業や農山村の理論的なことから地域に関わる事例まで、幅広く地域づくりに関わるということについて学ぶことができた。なかでも、継続的に地域づくりの取り組みをしておられる方のお話を聞く機会は大変貴重であり、実際に紀美野町で活躍されている方のお話を聞くことで多くの学びを得ることができたと感じている。実際に紀美野町で活躍しておられる方のお話から共通して地域に入っていくことや地域づくりに関わるうえで重要だと感じられたのは、以下の2点である。

1点目は、地域住民やコミュニティでの関係性の構築である。地域に入ることや地域づくりに関わることは、そのようなことをする側の地域への理解も地域住民からの理解も必要である。そして、地域は狭く深い関係性であるために、素の自分で地域住民と関わったり、地域の役回りや行事に積極的に参加し、いったりするなどの行動を地道に積み重ねていくことで、信頼を得て良好な関係性を築いていくことが重要であると感じた。このようなことについては、実際紀美野町に移住された向ファームの向博史さんやCafe & Guest House きみの さいか亭の水島千絵さんのお話から特に感じられた。また、このような関係性の構築の重要性を踏まえると、講義修了後の夕食交流会などは素を出し合える貴重な機会であり、このような場での交流が信頼へとつながるひとつの要素だと感じられた。

2点目は、積極性をもって関わっていくことである。1点目の地域住民やコミュニティでの関係性の構築にもつながることであるが、地域内での信頼を得ていくために自ら地域へ関わる積極性が重要だと感じた。また、起業や新規就農においては、守られる立場ではなく、自分が守ったり維持したりしていけないといけない立場であり、そのような立場の人の方が少ないため、能動的に情報を得ることの重要性を、特にキミノーカの宇城哲志さんのお話から学ぶことができた。

地域に関わって活躍しておられる方のお話を聞き、深く交流する機会をもつことができたのは大変貴重な経験である。私は、将来的には地元で地域づくりに関わりたいと考えており、きみの地域づくり学校を通して学んだことは今後の重要な糧になると感じている。また、さまざまな地域への関わり方を知っていくために、今後もこのような地域に携わる方と深く交流できる機会に積極的に関わっていきたいと感じられた。

1. はじめに

きみの地域づくり学校への参加を通して、私はたくさんの学びと出会いを得ることができ、地域の一員として生きていくことや、人との繋がりや素晴らしさに気づく機会となった。本レポートでは、そんなきみの地域づくり学校で私が学び、感じたことを振り返る。

2. 座学編を通して印象に残ったこと

全5回の座学編の講義から印象に残った学びをまとめると以下の2点が挙げられる。第一に、社会の変化が地域や農業に与えた影響についてである。第1回・第2回の講義では現代の農業や中山間地域が抱える課題について、実際に農業を営む講師の方のお話を聞く貴重な機会となった。農村の人口流出により、担い手不足や耕作放棄地の増加などの課題が生じていることを実感するとともに、その解決策としての関係人口や都市農村交流について学ぶことができた。特に秋津野ガルテンで行われている農泊分離型の農村ワーキングホリデーについては、講義後実際に自分で足を運んだことでさらなる学びに繋がった。地域に拠点施設を設けることは、単に農家民泊の「泊」の部分だけを担うのではなく、地域の新たな雇用の創出・その他の観光客の来訪による地域内経済循環の活性化に貢献していると思った。これからの時代、地域や農業を維持していくにはこれまでのような「閉じた農村」から、地域外の関係人口や新たな住民も巻き込んだ「開かれた農村」を目指していく必要があると感じ、社会の変化が地域や農業に与えた影響をマイナスのものにとどめず、柔軟に形を変え、変化をプラスの方向に持っていく地域づくりを担えるような人材を目指したいと思った。

第二に、地域の諸課題に対応できる地域の人材育成についてである。私はかねてより、地域に対する誇りや愛着の醸成に関して、学校や地域での教育が果たす役割について関心があり、地域づくり学校の中でも特に第4回の講義を楽しみにしていた。牧野先生や山上先生の講義、11月17日に開催されたシンポジウムを通して、子どもたちに将来地域に帰ってきたいと思ってもらうには、地域の人々がどのように子どもたちと関わっていくかという点が重要であると実感した。自身の経験も踏まえると、飯田市で行われている地域人教育や、りら創造芸術高等学校の教育で大切にしている「地域とつながる」ということは、子どもたちにとって「地域の人たちに見守られ育った」という感謝の気持ちや「次は自分たちがそのバトンを渡す番だ」という地域の一員としての意識を育むうえでとても価値のあることだと思う。そのような学びを子どもたちが受動的にするのではなく、私事化して自発的に取り組んでいくにはどのような土台を整える必要があるか、大学でさらに学んでいきたいと思った。

3. 学びと出会いを通して

講義を通して大学ではなかなか聞くことができない現場の方の想いを聞き、大学での学びをさらに展開させることができた。また受講生の皆さんとの交流は私の世界をさらに大きく広げてくれた。私はまだ自身の進路について考えている真っ最中なので、大学やきみの地域づくり学校を通して学んだことや身につけた力をどのように地域のために役立てられるか今後も考えていきたいと思った。

私がきみの地域づくり学校座学編で学んだ事として、2つ挙げられる。

1つ目は、地方で新たな事業を立ち上げる際の心構えについてである。今回、きみの地域づくり学校座学編で講義をしてくださった講師陣の方々は、多くが紀美野町外から移住してこられ、新たな事業を立ち上げてきた人々であった。そして、講義中ほとんどの講師陣が「大変なこともあった」「大きな壁にぶつかった」など、挫折の経験を赤裸々に語られていたことが、私の中で印象的であり、衝撃的だった。私がきみの地域づくり学校の講義内で、最も記憶に残っている講義の一つに、Cafe & Guest House きみのさいか亭の水島さんの講義がある。もちろん、民泊事業のノウハウや心掛けていることなど、事業に対するお話もあったが、水島さんのこれまでの人生と紀美野町に移住してきたからのマインドの変化についてのお話に言及されていたことが特に鮮明に思い出される。講義を受講した際に私自身が悩んでいた悩みとも重なる場所があったのも、印象に残った要因の一つとして挙げられるかと思われる。「自分が心地いい生活とは何か」を突き詰めていった結果、現在紀美野町でゲストハウスの運営をされているということで、私が学んだ事がある。それは、将来どのような活動をして、どのような生活を送っているかはまだ確定していないが、自分自身に向き合いその声を聞き続けることで、望んだ生活を手に入れられるということである。水島さん自身も紀美野町に移住しゲストハウスを開業されるまで、様々な道を選んできたと仰っていたように、考え続け挑戦し続けることが必要なのではないかと考えた。

ここまでは、私が参加した講義内で特に印象的であった講義を基に学んだ事について論じてきたが、ここからは全体の参加した感想を交えながら、私がきみの地域づくり学校座学編で学んだ事について述べる。講師陣に共通していると感じたのが「課題意識」「チャレンジ精神」である。まず「課題意識」について、自分のルーツや縁がある地域・分野に対し、何かしらの課題を見出している。そして、それを解決するために新規事業を立ち上げたり、研究の分野に進んだり、様々なアクションを起こしている。これらは、今後紀美野町のような地域の発展に良い刺激をもたらすのではないかと考えた。なぜなら、課題意識を持って新たな事業に取り組むということは、地域課題を自分ごととして捉え、考えているからである。こうした人が増えることで、紀美野町の産業や地域づくりの発想に幅が生まれるのではないかと考えた。そして「チャレンジ精神」について、これは元々紀美野町に全く縁がなく、移住してきた講師の方々によく見られたと考える。そもそも、自分に縁もゆかりもない地域に移住を決意したというのは、かなえたい目標のために新たな環境に飛び込んでいくチャレンジ精神が十分にあったからなのではないか。これは、水島さんの講義で印象に残った点の箇所でも述べているが、自分にとって心地いい生活、自分の人生にとって選びたい選択肢をつかみとっていく過程で、紀美野町への移住というターニングポイントが訪れたのではないかと私は考えている。私は将来、自分の出身地である高知県で、観光の仕事や地域に関わる仕事をしたいと考えている。その時、紀美野町のように、チャレンジ精神を持った人々が、「ここなら目標を達成できる」と思えるような地域づくりにかかわりたいという思いが、きみの地域づくり学校を通じて芽生えるようになった。

1.参加動機

私は、京都市内の都会にしては自然と触れ合う機会が多くある場所で育ち、物心ついた時から自然が大好きで、一般的に「日本の田舎」と呼称されるような場所・景観に強く惹かれていた。しかし、田舎での暮らしにあこがれがあるものの、田舎でどう仕事を始めるのか、そう続けていくのか、どう地域に入っていくのかなど多くの不安があった。そして、田舎の景観が好きだけれど失われつつあることをどうにかしたいと考えていた。考えていく中で、景観を整えるのも、後世へ繋ぐのも地域の「人」であることから、人々のコミュニティ形成、継続などに興味があった。そして、地域おこしをどう行っていくのか、どんな成功例、失敗例、工夫があるのかにも興味があった。そんな時、和歌山大学経由で紀美野町の HP にある「きみの地域づくり学校について」の説明文である、『「きみの地域づくり学校」は、これまでの地域づくりの取組みの裾野を広げるものであり、若者が紀美野町で暮らすことを考えるきっかけをつくり、また、地域で「なりわい」を創業しようという若い世代を応援する人材育成のしくみです。』という文を読んで、私が持っていた不安や問い、興味の答えがここにあるのではないかと思い参加を決めた。

2.講座の内容

多くの方が実際の成功例、失敗例を多く交えて講義してくださったおかげで、とてもわかりやすかった。私自身が行動を起こすときに、どんなことに気を付ければいいのかや、どんな工夫をした方がいいのかなど現実的に想像がしやすかったため、とてもありがたかった。講座を受けていく中で、法や条例、新しい制度など政治分野から行動を起こすことはとても影響力が大きく、大切なことではあるが、それについてくるような、志を持って「動く力」を持って行動したい意欲のある地域内外の「人」がいることの大切さを強く感じた。どちらか片方だけではうまく進まず、立ち行かなくなってしまう。行政側で対策をうったのにうまく行かなかったというような事例では、意欲のある「人」がいないことが原因である場合が多いのではないかと考えた。それに加えて「地域おこし協力隊」という制度があるかどうか、使用したかどうかにも差が出ていると感じた。講座内で何度も「地域おこし協力隊」の名を聞き、それがきっかけで地域の中に入っていく人の多さに驚いた。既に形成されているコミュニティの中に 1 人で行く場合と、自分自身で人を集めて進めていく場合とでは、地域へ溶け込めるかどうかの難易度の差が大きくある。そうした中で「地域おこし協力隊」の制度は、地域外の人間が地域に入って何かしたい場合に強い味方であるように感じた。都市では人間関係が希薄だが地方では違う、というよく聞く言葉はその通りで、地方では必要性があって人間関係が密になっていく。それが都市から地方へ移住する人の大きな不安だと感じている。実際に自分自身もその 1 人である。そのため、「地域おこし協力隊」やお試し移住ができる制度があったり、移住する前に移住者同士のコミュニティづくりを後押しする制度があったり、「都市と地方との文化のギャップへの不安」を取り除く工夫が様々に行われており、結果移住者も増えていることを見てとてもいい制度だと感じた。

3.まとめ

今年初めて本講座を受講したが、受講できてとても良かったと感じた。多くの事例や工夫、失敗談まで様々な役立つ情報を受け取ることができたことに加え、何より地域の方とのつながりができたこと、同年代で同じように田舎に魅力を感じる人がいて一人ではないのだと思えたことが、とても嬉しくありがたいことだった。

今回のきみの地域づくり学校は、一昨年に秋津野ガルテンで行われた「地域づくりの理論と実践 C」に参加し、そこで紹介があったことを受けて受講することとなった。所要により、全講義 15 回中 9 回の参加（第 2 回、第 3 回、第 5 回講義）となったが、その中で学んだことを下記でまとめる。

第 2 回で印象に残ったのは向講師の講義である。向講師の講義の中で印象的だったのは、「緑化木栽培を 13 年やってきて最初の 3 年は特に苦しく、何度も挫折し心が折れそうになった。でもあきらめずやってきたことで、緑化木の栽培を続けられている」という言葉だ。今は転職が容易な時代であり、正直 2~3 年で新たなキャリアに進む若者が多い傾向が見られる。しかし向さんがおっしゃられたように、心が折れることがあってもあきらめずに 3 年目を乗り超えることに意味があると感じた。おそらくその仕事に慣れて分かってくるのが 3 年ぐらいでそこを乗り越えることができれば楽しいこともあるだろうし、仕事にもやりがいが出てくると考えた。

第 3 回で印象に残った講義は尾藤講師の講義である。尾藤講師の講義では、日本食の可能性と日本食の持つ良さについて学んだ。G20 大阪サミットで提供された料理が各国首脳に提供するものとして最高のものであることに加え、泉州水ナスや但馬牛を使用しており、開催地大阪に近いところから仕入れた地元の食材を通じて料理を作ることが地産地消や食育の観点に大きく寄与するものであると考えた。またビーガン対応の料理やハラール対応の料理のお話も興味深かった。ハラール対応のメニューは昨年度から和歌山大学でも提供されており、カレーなどのメニューを学生が食べている。実際にイスラム教徒の知り合いの学生の話で、「自分はそのメニューの材料に何が入っているかを逐一確認しなければならない。だからハラール対応のご飯があることで確認をせずとも安心して食べることができるためありがたい。」というのを耳にした。訪日外国人が過去最多を更新しインバウンド需要が高まる日本で、今後はこのように海外の人が安心して食べられるものを提供できることが必要になると考えた。

第 5 回で印象に残った講義は岡司講師の講義である。特に秋田県五城目町の事例が印象的だった。高齢化率が 5 割を超える小さな町で、人が少なく活気のない廃れた商店街を朝市や拠点づくりを通じて来る人を増やそうとする取り組みがすごいと考えた。私の出身地（和歌山県串本町）を含めて和歌山県紀南地域は商店街の活気がないところが多い。しかし漁業や農業が盛んな街が多いため、こうした朝市などは開催できる可能性は大いにあると考える。五城目町のように人の意識が変わればこうした小規模地域でも商店街再生ができるということを理解した。

最後に今回のきみの地域づくり学校を通じて、新しい環境で新しいことにチャレンジすること、既存のものを守っていくことの地域づくりの柱となる 2 点を学んだ。これは今後の学生生活や社会生活に生かしていきたい。私が今回参加して感じた課題は、初年度から継続して受講している人やゼミの学生が多く、食事会等でもうすでに作り上げられたコミュニティの中に入っていくのが難しかったということだ。私は今回個人での参加となったため、秋津野ガルテンでの知り合いや一部の紀美野地域の人としか話せる機会がなかった。そこは私自身もまた今後の地域づくり学校としても改善すべき課題であると考えた。

今年度のきみの地域を通して、三つの学びがありました。

一つ目は、都市農村交流から、地域の持続性について考えることができました。去年から引き続いて紀美野町に通うことによって、去年よりも名前を覚えてもらえたり、地域づくり学校の雰囲気慣れ、積極的に行動したりすることができました。都市農村交流には関わりの段階があり、地域に関心を持ってから行動に移すまででなく、地域を訪れる回数や人との交流の深さなどによって段階が変わると身をもって感じることができました。また、地域内で資金が循環する仕組みを取り入れ、地域らしさを維持していくことが重要だと感じました。そのためには、地域住民や地元企業による、現状維持ではない、将来を見据えた挑戦する意思が必要だと思います。そして、実現するには自治体のサポートは欠かせないと考えました。このように、地域に関心を持つ人（関係人口）、都市農村交流を生み出し運営する人、地域住民、地元企業、自治体のさまざまな立場の人の思いが重なることで、本当の意味での「持続的な地域」、「地域活性化」になるのではないかと考えました。

二つ目は、印象に残った「地域連携力」についてです。今年度の講義の中で、牧野講師の「地域連携力」に関する講義が最も印象的でした。先ほど述べた地域をつくるためには、現在の日本で多くみられる1人で全てを行う自己完結型の人材では実現が難しく、他者と連携し、個人の能力を活かすことができる連携力を持つ人材が必要だという話でした。これまでの人生における背景が異なり、違った能力を持つ人々が集まり、地域について考えて新しいものを作り上げることが日常に存在する地域が今まで以上に増えるといいなと思いました。都心部では隣人の顔も分からない人がいる現代において、人と繋がること、誰かと協力して何かを成し遂げることは必要な要素であると改めて考えることができました。そして、地域らしさが表れる伝統芸能やお祭りなどを通して、地域と深くかかわることで、地域で人を育てることができます。地域に帰ってくる人材を育成したり、帰りたいたいと思える地域をつくったりすることも、地域連携力を高めることに繋がり、結果として持続可能な地域になるのではないかと考えました。

そして、三つ目は自然と触れ合うことの大切さについてです。改めて定期的に紀美野町を訪れることで、豊かな自然を目の前にする機会が増え、心が豊かになったように思います。また、地域のイベントやお店を訪れることもあり、座学を通して見る地域以外の視野も広がったと思います。今後も地域と関わっていくうえで、学術的な面も大切にしながら、自分の目で学ぶことも大切にしていきたいと思いました。そして、このような地域の学ぶ場所がもっと全国へ広がり、より多くの人が協力して活動していく未来を創りたいと強く願います。

私はきみの地域づくり学校の座学編を全項目受講した。

第1回の講義では都市農村交流とコミュニティビジネスという面からの講義だった。その中でも私が印象的だった事として、木村氏が講義されていた秋津野ガルテンができるまで様々な苦労があった事だ。秋津野ガルテンは学校を改装し農村ワーキングホリデーを行っている場所である。秋津野ガルテンの特徴は食事と泊まる場所を提供し、農家さんに対して負担が行かないようにしている事が特徴である。寝床や食事を学校で行うが、そもそも学校を改装し寝床や食事を提供するためには様々な住民の方の信頼などが大事になっていくと考えられる。そのような信頼を得なければコミュニティビジネスは成り立たない為沢山の努力をする事が大事である事が分かった。

第2回の講義では農林業の新たな担い手という講義だった。ここで印象的だった事としては井上氏の農業経営のブランディングという内容だ。私たちが何気なく食べている物は実はあまり農家さんに対して利益を得ていない事実がある。利益を少しでも得ようとするのであれば自分たちでブランディングをする必要がある。ここでの講義はみかんでブランディングをするという内容であったが、みかんそのものをブランディングするのでは無く、みかんを食べる時はいつかみかんに対して様々なストーリーがあると言った付加価値を付ける事でブランディングしている事が分かった。その為様々な努力や柔軟な発想が大事であると言う事が印象的だった。

次に第3回の講義は食と起業だった。ここでの特徴的だったのは宇城氏の話だった。一人で独立をするとなると様々な責任が伴うと言う話であった。私自身起業は難しそうや大変そうと言うイメージが強く、改めて話を聞いてそのように感じた。しかし、少しでも印象が変わった事がある。それは起業を少し単純に考える事が大事であると言う事だ。自分がこれは絶対に譲れない、これは絶対に優先度が高いというような形を取る事で単純に考える事が大事であると言う事が分かる。そのような先入観を外せたのは印象的だった。

第4回の講義では地域に学ぶ人づくりという講義内容だった。ここで特徴的だったのは牧野氏の話だった。進学校ではグループワークをしたことが無いと答えている人が多く驚いた。しかし、大学に入れば高校生の頃よりも大学生の方がグループワークをする経験がある事からいかに大事である事が分かる。そのためグループワークを小学生や中学生の頃から経験する事が大事であるが、従来の勉強も大事だと考えるので2つの事を両立する事が大事である事が分かる。

第5回目の講義は関係人口と地域おこし協力隊という内容であった。ここで特徴的だった事は水島氏の話であった。まず地域おこし協力隊に入って何がしたいのか、今後どのような事をしていきたいのかなどを考え紀美野町に移住してきた事を知った。この話で一番大事だったと思う事として前の講義にもあったようにこれだけは絶対に譲れない意志を決意する事が大事である事考える。紀美野町を含め全国には様々な中山間地域がある中で優先順位をつける事が大事である事が分かった。自分に合った暮らしや自分が納得できる暮らしが作れる事から優先順位をつける事が大事であることをこの講義で知る事が出来たのは大きな収穫の一つでは無いかと考える。

改めてきみの地域づくり学校で様々な苦労や経験を講義と言う形で学ぶ事ができ非常に有意義な時間になったと考える。このような講義を聞き自分も講義で学んだことを今後に生かしたいと考えている。

私は今年度初めてきみの地域づくり学校に参加した。昨年度は田辺市で講義を受講していて、様々な立場の人とともに地域について学び、意見交換する機会の大切さを知り、今年度はより視野を広げたいと思い、紀美野町という新天地での受講を決定した。

今年度のきみの地域づくり学校で印象に残った講義を挙げるとまず、キミノーカ宇城講師の「自己対話とパーパス」である。起業に関心はなかったものの、関係のない話だとは思えなかった。自分で何とかしていくという覚悟やこれまでの情報を吟味しつつ新たな情報を仕入れていくことなど、今後の人生において何かを継続するうえで重要な考え方と共通していると感じた。目的と覚悟を持つことの重要性を学び、意識していこうと思った。次に、りら創造芸術高等学校校長山上講師の「芸術・舞台芸術を中心においた地域人教育の実践」である。この講義はきみの地域づくり学校の開始時からたくさん資料をいただいております、芸術と地域がどう関係してくるのか関心があった。非常に幅広い高校教育はそれぞれ目的を持っており、その教育に取り組む理由がはっきりと理解できた。地域住民が地元を離れて寮で暮らす学生の親代わりとなっている関係が都会ではできない特徴の一つになっていると感じた。学生が卒業してからの進路や行動からもりら創造芸術高等学校や紀美野町との関係を維持することを意識していることを感じ、深い関係構築に繋がっているところが魅力的だった。

今年初めてお会いした講師の講義がほとんどを占める中、過去に何度かお話を聞いたことのある講義もいくつかあった。複数回受講する中で、一度では理解できなかったことが深く理解できたり、毎回新たな学びがあったりするところがとても印象に残ったことの一つである。特に、木村社長のお話は自分自身が田辺市に何度も訪れていることから秋津野地域のコミュニティを改めて学ぶのにとても良い機会になった。きみの地域づくり学校でも昨年度から引き続き講師を担当されている方がいるとのことで、昨年度から受講している人は講師との関係を築けていたり、より深い学びが得られたりしていると思うと、昨年度参加しなかったことを少し後悔した。しかし、それぞれの目標に向かって励む受講生とともに学び、意見交換してきたことで今年度初めての受講でもたくさんの人とかけがえのない関係を築けたと感じている。私は今年で大学を卒業し、社会人になるためこれまで通り来年度もきみの地域づくり学校を受講することは不可能かもしれないが、今後も紀美野町と関わり続けたいと強く感じた。

私は、今年度きみの地域づくり学校座学編に第2回、第4回、第5回に参加しました。講義では、大学の先生の方々による理論的な話をまず聞くことができ、その後に紀美野町や和歌山県内の現地で活動されているの方々による、実践的なお話を聞くことができました。去年から引き続き講師として参加されている方々の話は、去年一年間の知識を蓄えた上で聞くことで、より理解を深めることができました。また今年から参加されている講師のお話は、新鮮で自分の中になかった考えや方法を学ぶことができました。1年目の時とはまた違う学びが多かった座学編だったと思います。複数回参加する良さを理解できました。しかし去年と引き続き普段なかなか聞くことができない話を聞くことができ、とても貴重な経験ができたと思います。

今回の修了レポートでは、それぞれの回ごとに自分なりの考えをまとめていきます。

まず第2回では、「農林業の新たな担い手」というテーマで岸上講師、井上講師、向講師のお話を聞くことができました。少しの変化で担い手確保できるのか、できないのか変わってくることが印象に残っています。そのような状況なので、多様化していき柔軟に対応ができていくと、農林業の裾野が広がってくると考えます。また農業をやるうえでは、ブランディングを進めていくことで、農家の地位向上に繋がるため、安売りをするのではなく、消費者に届ける工夫も重要になると思いました。他には、辛抱強く結果を待ち続ける体力も必要になるということも理解できました。

つぎに第4回では、「地域に学ぶ人づくり」というテーマで牧野講師、山上講師、そしてシンポジウムという形で、西村講師のお話を聞くことができました。グループワークをする中で、多様な物差しで測れるということが、実践できたと思います。地域で人づくりの関係を構築するためには、様々な方向から見るのが重要であると考えました。また、教育という観点でお二人からお話を聞くことができ、早いうちから地域に関わりを持つことで、実践でも十分活躍できる人材を育成することができると思いました。

最後に第5回では「関係人口と地域おこし協力隊」というテーマで図司講師、田代講師、水島講師のお話を聞くことができました。階層的に信頼を得ていくことが、地域の人に信頼してもらえるための条件であり、大きなことを成し遂げるために必要であることが分かりました。水島さんも段階を踏んでこのような形で地域と関わっているので、この視点は重要な点だと思いました。またやりたいことは言語化していくことによって、具体的な方向にもっていくことができるため、必要な要素だと思いました。

去年も参加し今年もきみの地域づくり学校に参加することができ、2年間で大きな学びを得ることができました。去年の修了レポートで、自分の引き出しを増やすことを目標としていたが、新しい学びも身につけることができ、すでに身につけていた学びも理解度を深めることができたため、引き出しは増やすことができたと思います。これらの学びを活かし、社会人になっても活躍していきたいです。

きみの地域づくり学校では、大学教授や専門分野の有識者から地域づくりについて学ぶことができたほか、実際に現場で活動を行っている事業者の方からなりわいづくりや地域について知ることができました。全体を通して、地域づくりやなりわいづくりをしていく中で、地域の人はもちろん、行政や地域外の方とも協働し合いながら活動をするのが大切であるという点が改めて勉強になりました。

北裕子講師のお話では、棚田を活用した関係人口づくりについてお聞きし、保全活動には地元の人に加え、地域外からも多く携わっていました。実際に私自身も何度か棚田の保全活動に参加をしてきましたが、参加者は毎回異なっており、棚田を通して様々な方と出会い交流することができました。また、稲刈りを行うイベントの際には県外の方や子供連れの家族の方も参加をしており、様々な人と地域づくりを行う楽しさと重要性を感じることができました。北講師の話にもあったように、人とのつながりを創っていくことも大切ですが、それ以上にそのつながりを継続させていくことも重要だと学ぶことができました。

山上範子講師のお話でも様々な人との関わりについて共通して感じたことがあります。りら創造芸術高等学校では、地域の行事や授業の中で地域住民と生徒と一緒に活動をしていました。りら創造芸術高等学校の校舎は廃校になった学校を再活用したもので、学校を拠点に開催されていた祭りや行事が再び復活し、さらに催し物の回数を増やすことで地域が活気づいていると感じました。このような背景には、山上校長が地域の人を巻き込んで様々なアクションをしてきたことが挙げられると思います。山上校長の人を巻き込んで取り組むという行動力があったからこそ、地元の人と生徒が協働し、地域をより良くしていくことができていると感じました。私は何事にも受け身で行動をしてきましたが、自分から人に働きかけ、行動することも身につけていきたいです。

私は2年間きみの地域づくり学校を通して紀美野町に関係人口として関わってきました。講師の方々の講義から与えられた影響も大きく、それがきっかけで紀美野町内の地域づくり活動にも参加をし、多くの学びを理論と実践によって学ぶことができました。来年度からは社会人になるため、紀美野町やきみの地域づくり学校で出会った方と持続的に関わることは分かりませんが、機会があれば積極的に関わり繋がっていきたいと考えています。きみの地域づくり学校で得たことの1つである「人と人とのつながり」を大切に、活かしながら様々なことに取り組んでいきたいと思っています。

田舎に移住し、新規ビジネスをすることは人生において重大な選択である。

第6講義「移住と緑化木栽培と地域」はセカンドライフで田舎暮らしが大変な労力を要するといった。大変な理由の1つは移住してから就農しており農業が軌道に乗るためには年月がかかること。2つは田舎の人付き合いで信頼関係を築くまで時間がかかったこと。この講義から得られる教訓は田舎に移住して生活を安定させるには時間がかかること。老後に備えて農業で生計を立てようとするのは難しいこと。つまり、老後の生活資金を用意するだけなら新規就農して不慣れな農業で四苦八苦するよりも投資で資産を増やしたほうが確実である。お金を稼ぐためには自分が働くよりもお金に働いてもらう方が有効であり、労働にはやりがいを求めることが大切である。

第15講義「『関係人口と地域おこし協力隊』多業田舎暮らしとゲストハウスの運営」でも宿泊施設、飲食業、製菓業を移住してから初創業している。多業こそが生きる道というスタンスで人生を謳歌している。労働の理由が生活財を稼ぐためというのは良くない。就活に悩んでいる時期にこの考えになれたことはきみの地域づくり学校に参加した甲斐があったはず。

1 はじめに

経済学研究科で中山間地域の農業について研究していることもあり、きみの地域づくり学校の座学を通じて多くの先生から知見を得ると共に、意見交換などのコミュニケーションや今後の交流に発展すること、また実践のインターンシップとして、農業をはじめとする中山間地域の活動に触れることを目指してきみの地域づくり学校(以下、本学校)に参加した。

2 座学について

どの講義からも多くの知見を得ることが出来たが、ここでは今まであまり接することのなかった、以下の3つのテーマについて報告する。

第3講の「棚田を活用した関係人口づくり」小川地域棚田振興協議会長 北裕子氏は中田の棚田の再生を基軸に小川地域の振興にも積極的に活動されている。観光を展開して多くの人々が訪れると飲食、宿泊などのサービス対応が大変になる、また運営する人材や投資なども必要になる。まずはボランティア活動の「中田の棚田サポーターズ」や学生の課外活動で関係人口をつくっている。しかし、活動を継続するには資金も必要で、将来的にはビジネス化を検討する必要があると言及されており、他の地域における同様な活動事例においても参考になった。

第6講の「移住と緑化木栽培と地域」向ファーム代表 向博史氏は紀美野町への移住に当たり、紀美野町からの補助事業や事業の利益性も良好であり、近隣に組合の環境があることから緑化木栽培を選択した。その詳細な検討内容や就農後の周辺農家への「心得え的な対応」は地域の人々から受け入れられるために重要であり、今も継続されていることに共感した。現在は後継者がいないので、仕事の規模は自分のできる範囲に止めて、拡張する必要はないと考えている。

基調講演/第12講の「森が僕らのようちえん～地域資源を活かした人づくり～」NPO 法人智頭の森こそだち舎理事長 西村早栄子氏は智頭町の中山間地域にある森林や小川の環境のうまく利用した「森のようちえん」を運営されている。子供たちが自由に行動する中で遭遇する色々な問題を自主的に解決して、上級生が下の子供たちの面倒を見る仕組みなども醸成して行く。このような子育てから、子供たちの潜在的な能力を改めて認識した。また寄り添う教諭の対応も新鮮に感じた。このような取り組みに共感した子育て世代の移住者を促進し、智頭町の行政や地域の住民にとっても多くの発見と利点があると感じた。

3 終わりに

座学を受講して、紀美野町の地域活動、移住と農業、行政をはじめとする連携など、多くの知見を得ることが出来た。本学校で知り合った紀美野町の地域おこし協力隊、地域の皆様や講師の先生とは出来る限り、関係を維持できるよう努力したい。今後も都市と地域の交流や中山間地域の活性化について、より知見を深めた上で協働する機会を得たい。

最後に本学校を運営いただいた皆様に感謝いたします。

1回目だけはとにかく出席して様子をみようと思っていたところ、結局、本学校の魅力に引き込まれてしまい、座学編にはすべて出席をすることになってしまった。すぐれた講師陣の講義に、毎回新たな発見があった。また懇親会と二次会は楽しい時間だった。本当はこの時間に魅かれたのかもしれない。普段の畑仕事では若者に接することは全くないので、私にとっては貴重な機会だった。和歌山大学、追手門学院大学の学生たちとの会話は新鮮だった。自分の学生時代と比べると、本学校参加の学生たちはなんとなくしっかりとした考えをもっていることかと度々驚いた。また本学校に参加したことで、紀美野町役場の皆様はじめ町内の方々と知り合いになれたことも自分の財産になった。本学校校長やスタッフの方々にあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。以下は私の座学編での備忘録である。

“地域づくりに即効はなく、20年、30年の時間が必要である。住民が主体的に地域づくりに取り組み、諸困難に耐えてこそ、新たな知恵が生まれ道が拓ける”（木村氏）。“都市と農村の関係は、かつての「対立」から「交流・連繫・協働」へと変化がみられるなか、農村が「都市側の力」を自律的に活用することが重要だ”（藤田教授）。すなわち農村が「新しいよそのもの」を受け入れ「にぎやかな過疎」へと転化させる努力をしていくことが、“地域を開き直し（地域内の壁を破る交流）そしてつなぎ直す（分化したコミュニティのつなぎ直しおよび暮らしと経済のつなぎ直し）プロセスの起動となり、地域再生そのものの起動となる。地域の価値を、地域内外の主体が世代を交えて地域全体で継承し、積み重ねていくプロセス”（図司教授）こそが「地域づくりの本質」である。

「新しいよそのもの」とは、Uターン者を含む移住者のみならずいわゆる関係人口も含めて、この「地域をこよなく愛するよそのもの」ということであろう。将来の「新しいよそのもの」の創出に向けては、既存の学校教育枠では収まり切らない地域重視や自然尊重の教育、たとえば紀美野町のりら創造芸術高等学校や鳥取県智頭町の森のようちえん（当該地域そのものを教育の現場に位置づけそして教材に取り入れ、子どもたちに自主的に考えさせる大胆な教育方針を実践）が展開しているような教育が、大きく貢献すると確信する。“「育ちを信じて待つ」「大人は共感者たれ」”（西村氏）は、私の心に深く刺さった。社会人前教育のあり方は、早く見直す必要があるのではなかろうか。また地域においては意図をして「異種の血（知）」を取り込むことが欠かせない。都会では意図しなくとも血（知）が混ざり合うが、地域では異種を排除する傾向がどうしても強い。「新しいよそのもの」を受容すること、「都市側の力」を自律的に活用することは、地域自身が異種の血を取り込む努力なくしては成立しない。

直近の農政において、直接農業に従事していなくとも農業の周辺を支える人も農業の担い手と位置付けられるというお話（岸上教授）になぞらえるならば、「地域づくりの担い手」とは誰なのだろうか。地域を支える人、誰が中心かは別にしてまた地域内外の居住にかかわらず地域に関係するすべての人が、地域づくりの担い手と認識すべきであろう。幅広く担い手を位置づけることで、地域づくりにおける“「連携重視」の重要性”（牧野教授）とその意義が自ずと見えてくるのではないかと思う。

実践編

修了レポート

テーマ

「実践編で学んだことと
今後の展望」

●地域づくり学校実践編・インターン参加への経緯

私は今回の地域づくり学校に地域おこし協力隊として参加した。業務は民泊推進を目的とした紀美野民泊協議会のサポートである。紀美野町で魅力的な活動を行う方々や他市町の先進事例をお話しくださる方々と関わりをもちたいと考えて講義を受けた地域づくり学校の座学編。さらに自身の活動に特化した形で学びを得られると考えて今回の実践編のインターンに参加することにした。私のインターン先は風の古民家「うえみなみ」（以下、うえみなみ）さんである。

●インターン内容について

私がインターン業務として参加したのは主にご宿泊のお客様の食事の用意をはじめとする運営の補助と、イベント時の運営の補助であった。

基本的には食事の調理や提供・後片付けを任される場面が多かった。事前に宿泊人数や食事内容を把握しておき、宿泊当日の15時頃から20時頃まで、もしくは宿泊翌日の7時頃から10時頃までの作業である。

うえみなみさんではリピーターも多く、オーナーである南出さんと顔見知りであるお客様や、その宿泊棟をイベント会場としてワークショップなどを開催しつつ、そのまま宿泊するという利用のされ方も多い。そのため運営側とお客様の距離がとても近く、作業補助のなかでもお客様と関わる場面が多かった。また南出さんも、私がたくさんの方とお話ができるように場を整えてくださったために、ただのゲストとホストとの関係ではできないようなお話や交流ができたと感じている。焚火を囲んでお話をするような時間もあった。お客様の方も、運営側をただのスタッフではなくメンバーとして接してくださったこともあり、一般的な宿泊施設の利用客としては特異なケースであると思うが、特にこの焚火の時間は印象に残っている。

●インターンから得た学びについて

自身が作業補助により運営に参加したなかで、うえみなみさんには、この場所に来ること、この場所で交流することを目的に遠方からでも来るというお客様が多いと感じている。わざわざ遠くから山奥の紀美野町へ来て、うえみなみさんに宿泊する以外はどこにも行かずに帰られるお客様もいるほどだという。都市から来られた方は、山の中の静かな雰囲気や壮大な景色に歓声をあげておられた。

基本的には、宿泊施設は観光や用事を行うための通過点である。たとえそうではなかったとしても、それ以外の用事を何も作らずにどこかへ泊まりに行くということは少ないのではないだろうか。そうなり得るとすれば、よほどの売りや知名度が必要だと考える。その魅力を、うえみなみさんはもっていて、それを目的にお客様はこの町を訪れる。そういった価値を創出し、発信することが、紀美野町のような立地を活かす観光の形であるように感じる。

●まとめ

紀美野町は魅力の多い町だと感じている。しかし、それを外に発信しきれているかという疑問があ

る。先日、紀美野町で行われる企業研修に対して紀美野民泊協議会にも加盟する民泊施設を案内し、分宿した企画があった。その参加者の感想で、「和歌山市在住で紀美野町にも遊びに来たことがあるが、泊まったことはない。宿泊施設があることを知らず、「泊まる場所」という印象が全くなかった。」というご意見を頂いた。そのような層に向けて、「泊まる魅力」を提示・発信することができれば、2 日以上の観光にも結びつくのではないだろうか。この学びは自身の今後の業務にも活かせることである。

そのような視点をくださった今回のインターンの機会と、受け入れてくださったうえみなみの南出さん、スタッフの皆様に感謝して、きみの地域づくり学校実践編のレポートの締めとしたい。

きみの地域づくり学校実践編（インターンシップ）では次の体験をさせていただきました。

- ① 11/19（火）奈良県吉野郡下市町 瀧上寺周辺 特殊伐採（株式会社上中林業）
- ② 11/21（木）奈良県吉野郡下市町 瀧上寺周辺 特殊伐採（株式会社上中林業）
- ③ 11/27（水）紀の川市貴志川町 大多羅乳女神社 特殊伐採（株式会社上中林業）
- ④ 11/28（木）海南市藤白 砂防ダム建設現場 特殊伐採（株式会社上中林業）
- ⑤ 11/30（土）紀美野町三尾川 きこりのピザ屋 SOMAUD
- ⑥ 12/1（日）紀美野町三尾川 きこりのピザ屋 SOMAUD
- ⑦ 12/5（木）紀美野町松ヶ峯 みさと天文台第1 駐車場 伐採（株式会社上中林業）
- ⑧ 12/7（土）紀の川市貴志川町 貴志川八幡宮 特殊伐採（株式会社上中林業）
- ⑨ 12/8（日）紀美野町三尾川 きこりのピザ屋 SOMAUD
- ⑩ 12/9（月）和歌山市伊太祈曽 伊太祁曽神社 特殊伐採（株式会社上中林業）

このインターンシップを受講するにあたってフルハーネス墜落制止用器具、ロープ高所作業、高所作業車（10m 未満）の特別教育も受講しました。

株式会社上中林業では、立木にロープを使って登り、建物や電線にかかる支障木を切り落とす「特殊伐採」の作業を見学させていただきました。私が活動している地域おこし協力隊の自伐型林業とは全く違う林業で、林業の奥の深さを感じました。そして「特殊伐採」によって切り落とした木材を処分するのではなく何かに活かせないかと考えたのがきこりのピザ屋 SOMAUD の始まりとのことで、この両方を経験させていただきました。

「特殊伐採」をやり始めてから 20 年になるとのことで、それ以前のお仕事についても教えていただき、きこりのピザ屋 SOMAUD を始めてからも 7 年になるとのことで、こちらも開業するに至った経緯等もお聞きしました。林業からピザ屋へ面白いストーリーで繋がっていることを知りました。現在はほぼ半々くらいの規模とのことです。とてもいいバランスで半林半 X を実践されていると思います。さらに現在は自宅を改装中で民泊（宿泊業）という次なる展開を推進中とのことです。楽しいこと、好きなこと、やりたいことを組み合わせて仕事にしていくという多業実践者の考え方がたいへん勉強になりました。すべて仕事ではなく趣味でやっているという感覚で「好きなことをやっているから休みなしでも苦にならない」という素敵な生き方だと思いました。これからは民泊（宿泊業）もスタートさせて、さらにおもしろさを追求していったほしいと思います。

今後の展望としては、このインターンシップで勉強できた半林半 X の実践者の思いや考え方を参考に、自分自身も半林半 X の X となる「なりわい」を見つけて定住できるようにしていきたいと思います。そして更なる多業をスタートさせることができるようにいつもおもしろさを追求していきたいと思います。このインターンシップを受け入れてくださった皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

1. はじめに

実践編では私は、田辺市の上秋津地区にある「秋津野ガルテン」で農業体験をさせていただきました。上秋津地区では、地域づくり活動がかなり前から盛んで、住民主体の地域づくりの一環で秋津野ガルテンができたというお話を学生時代の講義で学び、一度行ってみたいと考えていました。そして、この地域づくり学校の座学編で木村社長のお話をお聞きし、有難いことに実際に実践編でもお世話になることができました。

2. 実践編で学んだこと

1泊2日で実践編に参加させていただき、2日間で2軒の農家の方に、農作業を教わりながら、農業のことや上秋津地域の地域づくりについてお話を聞かせていただき、強く感じたことは、地域の未来を考える気持ちの強さと、受入体制の高さでした。

私は今回、家業である農業を継がれて10年ほどと仰っていたお若い農家の方と上秋津の地域づくりの歴史を作ってこられたおひとりの方にお世話になりましたが、お二人とも普段から主に学生の農業体験を受け入れられていて、とても分かりやすく教えてくださいました。そして、単なる農業体験ではなく、受入を行うことによる人との交流をととても大切にされていると感じ、地域全体で長い目で見たいいわゆる関係人口を増加させる取り組みの意味を実感されているように思いました。

また、収穫などの絵になる作業をする観光的な農業体験ではなく、受入時期に本当に行っている作業をさせていただく形という点がとても魅力的だと感じました（今回私は、みかんの収穫体験と剪定後の枝拾いをさせていただきました。）。もちろん親切に受け入れてくださったのですが、過剰なもてなしはせず日々の地域の暮らしを体験し受け入れるということが、地域づくり、地域活性化においてとても大切だと学びました。

3. 今後の展望

今回実践編に参加してみて、地域づくりとは住民だけが頑張っても行政だけが頑張ってもうまくいかないと改めて感じました。また、その頑張りの方法は座学だけではなく、実際に地域づくりを継続してされている方とお会いしてお話を聞かせていただくことが必要だと実感しました。地域づくりを継続して行っていくためには、自分事であることと、同じ方向を向く仲間が必要不可欠で、その「自分事」力を育むために、この実践編が活かされると思いました。

そのため、役場職員としてもこれまでよりも「自分事」として紀美野町の、また自分の地元の地域づくりを考えていきたいです。さらに第3回以降の地域づくり学校の受講生の皆さんには、ぜひ座学編に加えて実践編をぜひ受けていただきたいと思います。

4. さいごに

受入をしてくださった皆さま、地域づくり学校関係者の皆さま貴重な機会をいただき、ありがとうございました。この経験を今後活かせるように感じ、考えることを続けていきたいと思っています。

私はきみの地域づくり学校の実践編において和歌山県田辺市にある秋津野ガルテンにお邪魔し、農作業インターンに参加した。昨年度も秋津野ガルテンでインターンシップを行ったが、2回目となる今回はある程度農作業の知識が身についた状態で参加したこともあり、非常にスムーズに体験に入ることが出来た。また、顔見知りの農家さんも多く私の顔を見て「久しぶり！」などと声をかけてくださる方もいらっしやって、自分が上秋津の関係人口として地域コミュニティに参加出来ていることを実感でき非常に嬉しかった。今回2回計4日間にわたってインターンシップに参加したのだが、農作業以外のことも手伝いをさせて頂くことが多く「地域」に触れる機会が多かったことも自身にとって深い学びであった。一回目の参加の際、地元のお祭りが後日開催されるということでそれに向けた準備作業のお手伝いをさせて頂いた。大きな竹を山の上から細い農道を通して神社まで下ろす力作業から神輿の組み立てといった細かい作業まで、地元の農家だけではなく新聞記者さんや郵便局員さんなど色んな人が集まってみんなで準備をした。農家さん曰く、このお祭りの準備は面倒事では一切なく、日頃の農作業のいい息抜きになるそうでかなり力のある大変な作業もあったが住民同士で協力し合いながら伝統のある祭りを続けることに価値を感じた。インターンシップに参加して、地域社会に関わる問題を解決するために学生ができることは、地域を知ることだと痛く実感した。包括的に地域社会の課題を学んでも夫々の地域によってその問題は異なっており、現状とその背景を地域毎にフォーカスして知ることが重要である。受け入れる地域側も地域を知ってもらうことの重要性を理解しており、関係人口を増やすべく広い窓口を設けていることが多い。(インターンシップなど)これからの地方創生を担う若者たちが地域を知るきっかけづくりとなるような受け入れ体制の整備と学生の積極的な参加が今後の地域づくりを活性化させるポイントになるかもしれない。

私は、株式会社 Citrus で 4 日間、実践的な学びを行った。主な実践内容はみかんの収穫である。社員さんやインドネシアからの研修生と共に平地から段々畑までの様々な畑で作業を行った。危険が伴い重労働である側面もあるが魅力ある体験だと感じた。自然に囲まれ 1 日中 1 つの作業に没頭すること、スマートフォンを触る機会も無いため、デジタルデトックスが実践できたことは、心のリラックスにつながったと感じる。また、作業の中でみかんのことを教えていただいたり、楽しくお話をしたりして、受け入れ先の方と関わる時間はとても良いものだった。食と農のつながりを感じるきっかけになったり、農村の暮らしに触れる機会になったりすると感じた。また、社長さんである佐々木さんが行っている研究についてのお話を聞いた。特に GAP（農業生産工程管理）についてはパワーポイントを用いて詳しく説明していただいた。食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農業経営管理といった分野ごとにガイドラインが設けられ農業従事者に求められる行動が示されていた。建設業よりも農業の方が、死亡率が高く、高齢化も相まって意識していくべき事項であると感じた。株式会社 Citrus でも研修を行ったり、GAP 認証取得を行ったりしていると聞いた。消費者に安全でおいしい物を提供すること、環境に配慮すること、従業員の働きやすい環境整備に取り組んでいると感じた。また、有田川バイオマス発電所の見学にも連れて行っていただいた。地域の雇用を生んだり、再生可能エネルギーとして、付近の入浴施設に熱を供給したり、森林の整備を行いつつ、地域に経済循環を生み出す役割を担っていると学んだ。加えて、発電で利用して、炭になった木材を、地域の農家が土壌に混ぜて活用するという仕組みを行っていかうと取り組みを始めている。炭は吸着作用があり、これまで地中まで通貫していた農薬や水に流れてしまっていた農薬を保持することができるため、散布する量を抑えることができると知った。

今後の展望としては、株式会社 Citrus でのインターンシップ終了後も様々な地域で農村、農業と関わりを持ち続けたい。これまで、大学の講義やきみの地域づくり学校座学編でお話しを通して農業について学んできた。しかし、今回実際にみかん畑に行き、みかん収穫を行ったことで、理論として理解していたものが体験としてより深い理解につながったのではないかと考える。関わり続けたい 1 番大きな理由としては、私自身がみかん収穫を通して、農業の魅力を体感したからである。これまで関わりがなかった農が生活の中に入ってきて、乖離していた食と農のつながりを意識するきっかけになるのではないかと感じる。これからも農作業による心のリフレッシュと体験するわくわくを感じ続けていきたい。

私はインターンシップで、Cafe & Guest House きみのさいか亭の水島さんにお世話になり、インターンシップの期間内で1泊2日の実践を3度行った。さいか亭さんでは、ゲストハウスの運営や和菓子カフェの営業だけでなくお弁当やオードブルの提供、宴会会場としての受け入れなど、様々なことが行われており、それぞれの仕事を体験させていただいた。

ゲストハウスでの仕事内容は、宿泊者への食事提供や宿泊場所の清掃、準備であった。さいか亭は一棟貸しのゲストハウスであるため、ホテルなどの一般的な宿泊施設に比べ、清掃の範囲が広い。しかしながら、宿泊客に前に宿泊した人の気配を残してはならないため、細かいところまで気を配る必要がある。例えば、シンクや風呂、洗面所といった水回りには水気を残さないことや、床に落ちている髪の毛、窓についている指紋までなくすことなどが注意すべき点であった。また、食事の準備は宿泊者の方の希望に沿った形で行われていた。今回、わたしがインターンシップの中で出会った方々は、宿泊棟での食事を希望されていたため、宿泊棟に弁当を作り持って行った。通常はカフェのある建物にて食事をする形になっているが、宿泊される方の要望に合わせた対応をされている。一般的な宿泊施設では対応が難しいことも、一棟貸しであるという特徴や、水島さんの対応力、おもてなしの気持ちによって実現できているのだということを、インターンシップを通して学んだ。また、水島さんのお話から、宿泊者の方と会話する機会や紀美野町についてお話する機会があるだけでなく、研修旅行で訪れた海外の子供たちと川に出かけたり、海外の方から郷土料理を教えてもらうなど、一方向の情報提供ではなく、互いの文化を共有しあうことができる点がゲストハウスの魅力であるということも学んだ。私自身、ゲストハウスに宿泊した経験がなく、人見知りの自分にとってはこの先も宿泊する機会がないのかなと思っていた。しかしながら、今回の体験を通して、宿泊客との交流の温かさに触れることができ、実際に宿泊してみようと思うようになった。

カフェでの仕事内容は、週末に開店する和菓子カフェで提供する和菓子作りであった。私は幼いころから和菓子に興味があり、さいか亭さんをインターンシップ先として希望した理由の一つは和菓子に触れる機会があると考えたためであった。自分でも和菓子を作ったことはあったが、さいか亭さんで作る和菓子は地域で獲れる果物を使ったものであり、斬新さと新鮮さがあった。季節感を大切にしている和菓子が地域らしさを取り入れることで、カフェを利用する人や和菓子を購入する人が紀美野町の魅力を感じることができる点が素晴らしいなと感心した。

また、宴会会場としての利用やオードブル、弁当の注文も受けており、その準備を体験させていただくこともあった。注文した人の年代や特徴に合わせ、メニューを工夫することや彩りを意識して盛り付けるとことは食べる相手には気づかれないかもしれないが素敵な工夫であると感じた。

きみのさいか亭でのインターンシップ活動を通じて、相手のことを考えて何かを行うことの大変さと楽しさの両方を知ることができ非常に貴重な経験となった。また、水島さんは様々な職場で働かれた経験もあり、私自身の今後のことについて考えるにあたり参考になるような様々なお話をさせていただいた。私は食を通じて沢山の人の幸せにしたいという想いがありながらも、現在は食について詳しく学んでいるわけではなく、将来に不安を抱いていたが、想いの叶え方は様々であることを学び、今持っている想いを今後も大切にしながら過ごしていきたいと考えるきっかけとなった。インターンシップで学んだことを生かし、自分がわくわくすることに積極的に取り組んでいきたいと思っている。

私は、きみの地域づくり学校実践編で農業生産法人 株式会社 Citrus 様に受け入れていただき、体験を行った。ここでは主にみかんの収穫体験をさせていただきながら、さまざまな方々との交流をすることができた。私は農業体験をすることが今回初めてのことであり、初めての経験に楽しみながら取り組むことができた。それだけでなく、実際に作業を行うことによって農業の大変さを実感したり、交流の中で農業の厳しさを学んだりすることができた。この農業の厳しさを実地で学べたということが今回のきみの地域づくり学校実践編での大きな経験だと感じている。

農業の厳しさというのは次の2点で特に感じた。1点目は、農作業自体の大変さである。今回の農業体験では4回の機会の中で、2回が斜面の園地で行った。斜面地では収穫自体での体への負担も大きなものであるが、自分が移動するだけであっても大変なものであり、斜面地での栽培が多いみかん収穫ならではの農業の厳しさを作業の中で実感した。農業従事者は高齢化が進んでいる現状もあり、この農作業自体の大変さが農業をする人の減少にもつながっているというのは、実際の体験の中で非常に納得できた。また、みかんの収穫は斜面の園地が多いだけでなく、毎年違うような実のつけ方をするとところでも、他の作物で進められているような農作業の自動化による農業従事者の負担軽減は難しいものであると実地で体験することで感じた。加えて、農業は一般に事故が起きやすいとされる建設業よりも事故リスクが高いことを交流する中で聞いたが、みかん収穫をする中で木の高いところになった実を収穫するところを見たり斜面地での移動をしたりすることで事故リスクが高いというのも納得であり、そのようなところでも農作業の大変さを感じた。

2点目は、新規就農の難しさである。これについてはさまざまな方々との交流で学ぶことができた。農業を一から始めようとしてもまず農地を購入することに様々な制約がある上に、農山村は顔を知っているところでの関わりが深いところから、新たに参入するということのハードルの高さがあることを学んだ。また、株式会社 Citrus では就農を支援されておられるが、そのような新規就農者の受入先が少ないというところにも新規就農の難しさがあるというのを学ぶことができた。

私は、将来的に地元で地域活性化に関わりたいと考えており、その中で農業にも関わるのではないかと感じていたが、今回の体験の中で農業に関わるためには知っておかなければならない農業の厳しさというのを自分の身で体感できたと思う。この経験を今後に生かしていきたい。

1.はじめに

私は(株)上中林業での実践編インターンシップに参加した。私がインターンシップ先を選んだ理由は、大学での地域連携プログラムを通して林業に関心を持ったこと、私たちの生活を支えている森林を守るということに興味湧いたからである。(株)上中林業では、「きこりのピザ屋 SOMAUD(以下 SOMAUD)」というピザ屋も経営しており、平日にインターンシップへ行ける日が少なかったため、実施した4回のインターンシップのうち3回はSOMAUDで行った。

2.きこりのピザ屋 SOMAUD でのインターンシップ

私は普段旅行会社の業務センターでアルバイトをしており、飲食業でのアルバイト経験がなかったのが最初はとても緊張していた。しかし SOMAUD でのインターンシップでは、「美味しかったです」という感想が聞こえたり、自身が直接「ありがとう」と言ってもらえたりした。この経験が自分にとっては本当にうれしかったし、やりがいを感じることができた。また SOMAUD は主に土日に営業しているが、どの日も人が途切れない程の来店があり、遠方であっても「わざわざ訪れたいお店」のすごさを実感した。紀美野町には SOMAUD だけではなく、起業して飲食店などを経営する人が多くいる。このことはそれぞれの来店客が「せっかく来たから他のお店も寄ろうか」という地域内の回遊性を高めているのではないかと考え、地域経済の活性化に大きな意味があると感じた。

3.上中林業での特殊伐採の参加

上中林業でのインターンシップでは神社での特殊伐採に同行した。作業の見学や、伐採した木を片付ける作業などを行う中で、1本の木を切るにも多くの段取りがあることが分かった。木を切り出すための障害になる周辺の木や枝を事前に切ったり、よりスムーズに作業を進めるためにクレーンでどこに下ろすか考えたり、チームでの連携ととても高度な技術が求められることを体感することができた。

4.まとめ

インターンシップを通して、元々あった産業や資源に対して、起業という形で新たな価値づけができるという可能性を感じた。SOMAUD では伐採で切り落とした木材をピザ窯の薪として利用することで、廃棄物であったものに新たな価値を与え、ひいては地域経済や観光の活性化に貢献しているといえる。座学編・実践編を通して、既存の地域資源に対してどのように価値を再発見していくか、それを活用していくかが地域づくりを考えるうえで重要だと実感した。またその主体としての関係人口の役割について大学や来年のきみの地域づくり学校を通して学び、自分が地域の将来を支えられる人材になるには何が求められるのか考えていきたい。

1.はじめに

今回私がインターン実習をさせて頂いたのは、「KATAKOTO CRAFTS」さんである。昔から大工仕事に興味があり、高校時代は高等工業専門学校の建築学科に通っていた。中学校での木材加工の課題があった授業が楽しく、実際にやってみたいと思っていたが、高専では実際に施行する授業はなく、あまり出来なかった。そのため、実際の現場を見たり、体験したりしてみたいと思い、希望した。

2.KATAKOTO CRAFTS さんでのインターンで学んだこと

2日間のインターンシップ期間で、古民家を改修したカフェの施工の手伝いや、シェアハウスの隣に新しく作っている「宿泊棟」や「トイレ・シャワー室」の玄関部分の施工のお手伝い、普段シェアハウスの薪ストーブで使用している薪を割る作業を体験させてもらった。打合せの日に私が実際の施工作業に興味があることを伝えていたため、インターンの時間のうちの多くの時間施工のお手伝いをさせて頂けた。初めてやる作業がほぼ全てだったがどれも楽しく没頭できた。高専時代に学んだ工法、法規に沿った材の利用、教科書に載っていた建築素材など、座学で学んできたものが施工現場にそのまま広がっていた。さらに、知っている材や工法の話が出てきたと思ったら授業では習ったことのない実践でしか知ることのできない話や、工法の歴史や意味の話も聞くことができ、とても勉強になった。

今回のインターンで学んだことの1つに「会話の大切さ」がある。このこと以外にも知識的なことや地域づくりのためのことも学ばせていただいたが本レポートではこのことに言及したい。

インターンの作業中、もう一人同じように時々働きに来ている若い男性がおり、その方と一緒に作業をした。作業中は出自の話から大学での話、趣味の話まで様々なことを話していた。その方とは初対面だったがオーナーの片桐さんが明るく話しかけ、楽しそうに話されていたため、とても打ち解けやすかった。そして KATAKOTO CRAFTS さんが作られたシェアハウスには 20 代前半の日本人カップルと地域おこし協力隊に所属しているインド出身の女性がいた。いつも片桐さんが楽しそうに話してくれていたため、その方々とも作業の途中の休憩で色んな話をすることができ、初めてのシェアハウスのコミュニティでも難なく入ることができた。このことから、片桐さんはどんな人でもコミュニケーションを積極的に取って、コミュニティを作る・維持することを重要視しているのだと感じた。実際、初めて会う人が多く、仲良くなることができるか不安だった私にとって、積極的に会話をしてコミュニティに歓迎してもらったことはとてもありがたく、安心できる大きな理由だった。このことは高校・大学生など学生の小さなコミュニティだけに通じていると忘れがちなことであり、新しい人を呼び込んでも定着してもらうことが難しいという問題の理由に既存コミュニティになじめないということがある。この問題の解決にはこの片桐さんのようにトップの人が積極的に新しい人と会話を通して関係を築き、既存コミュニティへの足掛かりを作ることが大切だと学んだ。

3.今後の展望

今回のインターンで学んだことや体験させて頂いたことを、これからの人付き合いの中で生かしたい。そして来年の4月頃から、頻度は少しずつだが KATAKOTO CRAFTS で働きたいと思った。

きみの地域づくり学校実践編では、一昨年の大学の講義から関わりを持たせていただいている「秋津野ガルテン」に12月7、8日に訪問させていただいた。秋津野ガルテンでの2日間の活動を通じて学んできたことを下記でまとめる。

今回の実践編を通じて学んだことは2点ある。

1点目は「1つの柑橘が自分たちの手元に届くまでに様々な苦労があること」である。今回の2日間のインターンシップでは、小谷農園さんで主に橙の収穫とミカンの箱詰め・袋詰め、かぶせる袋づくりの3つの仕事のお手伝いをした。

まず橙の収穫で感じたことは、とにかく腰が痛いことである。光の方に橙などの柑橘は集まる、そうすると傾斜のきついところとかつ遠いところに実がなっているので収穫するのが容易ではなかった。腰を曲げて、手を伸ばすこの動きは普段そこまですることがないのできつく感じた。農園の人たちは、私がようやく1つ取れたというところで5、6つと収穫していてその速さに驚いた。足腰が必要な仕事だとやってみて実感した。次に箱詰め・袋詰めでは、形のいい蜜柑を選定するのが難しいと感じた。でこぼこのものがあつたり、傷があつたり、大きさがあるのでどれが詰めて出荷できるのかを選別するのに多くの時間を要した。だいたい50gという制限の中で袋詰めを行った際、重さを量るときに最初は結構ずれがあつたが、途中からは慣れてきてぴったりのときは非常に嬉しかった。かぶせる袋づくりでは、使用済みのくしゃくしゃになった袋をまっすぐに戻す作業を行った。地味な作業だったがこうした地味な作業があるからこそ、甘い柑橘ができるのだと大切さを知った。以上が農業を実際に体験して感じたことである。

2点目は「秋津野は人と人とのつながりが強く、また学生への受け入れの意識が強いということ」である。これは一昨年から秋津野に行くたびに感じていることだが、農家さんどうしのつながりがとにかく強い。同業者どうしで助け合いの精神があつて、ライバル関係というのは一切存在していないように思う。どちらかと言えばみんなで儲かっていけばいいというスタンスを感じる。また大学生を受け入れようとしてくれているのが、農家さんの温かさを通じて感じる。これだけ狭い地域である程度の強いコミュニティが強い場所では、よそ者は受け付けられないみたいなイメージがあるが上秋津は全くそんなことがなく、秋津野ガルテン主導で様々な農家さんが周りにいて毎回違う農家さんのところに行けてすごく新鮮である。また行きたい、今では私の「第2の地元」だと思う。

以上の2点が今回のインターンシップで学んだことである。これからも継続的に上秋津地域に関わっていきたいと考える。

1 はじめに

きみの地域づくり学校(以下、本学校)に参加する前から、中山間地域の活動に興味があったが、本学校で座学を受講、交流することで、より関心を持った小川地域棚田振興協議会(中田の棚田)(以下、協議会)をインターンシップの受け入れ事業者を選んだ。座学の第3講で協議会長 北裕子氏が言われていた、ボランティア活動の「中田の棚田再生プロジェクト」や「中田の棚田サポーターズ」の実践において、教えていただいた事柄や体験から学んだこと、思ったことを報告する。

2 実践について

中田の棚田で開催される各種イベントに10月から6回参加することで、農作業、農機具、運営などを体験することで、中山間地域の現状と今後の展望に触れることが出来た。今まで体験したことがない稲作作業のほんの一部を体験するだけでも、作業の大変さを充分に感じた。一方で、イベントとして、収穫につながる稲刈りを楽しむことも出来た。

観光イベント事例の棚田内キャンプの準備では、道幅が狭く移動が軽自動車となり、来場者の駐車場も遠いため、持ち物の搬送に工夫が必要である。中田の棚田は紀美野町から生石高原、有田川町のあらぎ島、清水地区に至る県道180号線(野上清水線)に隣接しており、今後も一定の交通量が見込めるため、都市からの関係人口の増加が期待できる。

農機具は耕耘機、バインダー、チップパーなどが揃っている。一部の農機具は左右へ曲がる際、両輪のいずれかのクラッチを入切するため、棚田のような傾斜地の移動で両輪のクラッチを切るとブレーキがかからず危険である。農機具メーカーでは傾斜地仕様へ改良する対応は難しく、安全性の確保は今後の課題である。地域の水資源である竜王水で棚田の一部を灌漑するため、導水する用水路は約200年間、水資源を支えてきた貴重な土木遺産であり、加えて、水量調整用タンクなど、和歌山県も設備管理している。

収穫祭や購入して食した、うるち米「あさひ」は大変美味しく、とても満足したが、自然栽培のため、年度毎に収量が低下する。今後、再生する棚田を含む収穫量と売上高の増加は厳しく、有機農業への転換や就農者の兼業などの検討が必要になると思った。

3 今後の展望

中田の棚田の風景と体験農業、観光は都市からの関係人口を増やす上で、十分に効果的である。私も「中田の棚田サポーターズ」に登録して、農作業はもちろんのこと、例えば、農機具の課題解決などの知見を増して、今後も協働することを目指したい。

4 終わりに

「中田の棚田サポーターズ」の活動やイベントに参加することで、今までにはない農作業と対話を経験することが出来た。引き続き、3 今後の展望に向けて努力したい。また本学校の活動ではないが、和歌山大学観光学部の山岸先生指導 LPP の報告会に参加する機会をいただき、学生の「中田の棚田」への関心や思いが十分に伝わる報告内容であった。

最後に、ご指導いただいた会長の北様、地域おこし協力隊の伊田様、中田の棚田再生プロジェクトの行年様、中原様、西原様、前峠様をはじめ、皆様に感謝いたします。

令和 6 年度きみの地域づくり学校まとめ

発行日 令和 7 年 2 月 1 日

発 行 きみの地域づくり学校運営協議会
事務局

〒640-1243

和歌山県海草郡紀美野町神野市場 226-1

紀美野町役場美里支所まちづくり課内

TEL : 073-495-3462 FAX : 073-495-3334

E-mail : support@kimino-cds.org
